大分県立埋蔵文化財センター調査報告書　第27集

大分市

府内城・城下町（第34次調査）

ふないじょう　じょうかまち　だい　じちょうさ

－国道197号道路改良（歩道改修）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2023

大分県立埋蔵文化財センター

大分県立埋蔵文化財センター調査報告書　第27集

大分市

府内城・城下町（第34次調査）

－国道197号道路改良（歩道改修）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

２０２３

大分県立埋蔵文化財センター

序　　文

本書は、国道１９７号道路改良（歩道改修）事業に伴い、大分県教育委員会が大分県土木建築部大分土木事務所の依頼を受けて実施した、府内城・城下町（第３４次調査）の発掘調査報告書です。

府内城は慶長２年（１５９７）に福原直高によって築城が開始され、竹中重利によって完成された近世城郭です。江戸時代を通じて府内藩の藩庁が置かれ、近代以降は大分県庁が置かれるなど、大分の政治の中心地でありました。県庁移転後は城址公園として整備され、昭和３８年（１９６３）には大分県指定史跡に指定されています。

発掘調査は、歩道改修に関連してクロマツの移植に際して実施したものです。大手前のクロマツの古木は独特の樹形が府内城とマッチして独特の景観を醸し出しており、地域の人々から親しまれる存在でもありました。その移植作業は大きな注目を集めましたが、この移植に伴って県指定史跡となっている石垣の一部を一時解体し、移植後に復元する調査が行われました。その結果、解体した石垣は大部分が近代以降に積み直されたものであることが分かりましたが、府内城の石垣の解体を含む調査が行われたのはこれが初めてであり、府内城の解明につながる手がかりが得られたものと考えています。また、移植したクロマツの根元では石垣の痕跡の可能性のある石列も発見されるなど、小規模な発掘調査ながら、府内城に新たな知見を与える成果を得ることができました。

本書が、埋蔵文化財の保護と啓発とともに、学術研究の一助として活用されれば幸いです。

最後に、発掘調査の実施にあたり多大な御支援・御協力をいただきました関係各位に対し、衷心から感謝申し上げます。

令和５年３月３１日

大分県立埋蔵文化財センター
所長　　松　本　昌　浩

例　　言

1　本書は大分県大分市荷揚町に所在する、府内城・城下町（第34次調査）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　発掘調査は国道197号道路改良（歩道改修）事業に伴い、大分県土木建築部大分土木事務所の依頼を受け、大分県立埋蔵文化財センターが実施した。

3　発掘調査は平成29～令和３年度に実施した。調査期間・担当者は下記のとおりである。

第34－1次調査　平成29年４月26日　担当：横澤　慈（大分県立埋蔵文化財センター主査）
第34－2次調査　平成30年３月13日　担当：横澤　慈（　　同　　上　　）
第34－3次調査　平成31年１月18日　担当：横澤　慈（　　同　　上　　）
第34－4次調査　令和３年12月６日～令和４年３月８日　担当：植田紘正（　　同　　主事）

4　発掘調査の実施にあたり、調査地に所在する石垣の一時解体に伴う三次元点群測量及び石垣解体面の写真測量を九州建設コンサルタント株式会社（大分県大分市）に、石垣解体及び復元に係る文化財石垣技能指導を有限会社エムズ（佐賀県唐津市）にそれぞれ委託した。その他の遺構実測図および記録写真撮影等調査記録の作成は調査担当者が行った。

5　出土品の整理作業は令和４年度に実施し、株式会社九州文化財総合研究所（大分県大分市）に委託した。その他、発掘調査報告書の作成業務は大分県立埋蔵文化財センター調査第一課　副主幹　横澤　慈が担当した。

6　発掘調査に係る実測図や写真等調査記録、出土遺物は大分県立埋蔵文化財センター（大分市牧緑町１番61号）で保管している。

7　本書の執筆・編集は横澤が行った。

目　　次

序文

例言

第１章　調査に至る経緯と発掘調査の経過

第１節　調査に至る経過…… 1

第２節　発掘調査（本調査）の方法と経過…… 2

第３節　整理作業・報告書作成の経過…… 4

第４節　調査組織の構成…… 2

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の地理的環境…… 3

第２節　遺跡の歴史的環境…… 3

第３章　発掘調査の成果

第４章　国道197号道路改良事業（国道197号リボーン）に伴う立会調査

……28

第５章　総括 ……36

報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　国道197号道路改良（歩道改修）事業概要図 …… 1
第２図　府内城・城下町と周辺の遺跡…… 7
第３図　府内城・城下町第34-2・3次調査実測図 …… 9
第４図　石垣立面図及び石垣解体範囲・石材番号…… 13
第５図　石垣解体面実測図・土層断面図…… 14
第６図　府内城・城下町第34-1次調査出土遺物実測図 …… 15
第７図　府内城・城下町第34-2次調査出土遺物実測図① …… 16
第８図　府内城・城下町第34-2次調査出土遺物実測図② …… 17
第９図　府内城・城下町第34-2次調査出土遺物実測図③ …… 18
第10図　府内城・城下町第34-2次調査出土遺物実測図④ …… 19
第11図　府内城・城下町第34-3次調査出土遺物実測図① …… 20
第12図　府内城・城下町第34-3次調査出土遺物実測図② …… 21
第13図　府内城・城下町第34-4次調査出土遺物実測図① …… 22
第14図　府内城・城下町第34-4次調査出土遺物実測図② …… 23
第15図　府内城・城下町第34-4次調査出土遺物実測図③ …… 24
第16図　府内城・城下町第34-4次調査出土遺物実測図④ …… 25
第17図　府内城・城下町第34-4次調査出土遺物実測図⑤ …… 26
第18図　府内城・城下町第34-4次調査出土遺物実測図⑥ …… 27
第19図　立会調査地点図…… 28
第20図　府内城・城下町立会調査出土遺物実測図①…… 20
第21図　府内城・城下町立会調査出土遺物実測図②…… 31
第22図　府内城・城下町立会調査出土遺物実測図③…… 32

表　目　次

第１表　府内城・城下町第34次調査に係る法定手続等…… 2
第２表　府内城・城下町第34-4次調査石垣築石一覧 …… 11
第３表　国道197号道路改良事業に伴う立会調査一覧 …… 28
第４表　遺物観察表（土器・陶磁器）…… 33
第５表　遺物観察表（瓦）…… 34
第６～８表　遺物観察表（土製品・石製品・金属製品）…… 35

図　版　目　次

図版１　第34-1次調査／第34-1次調査石列検出状況／第34-2次調査東区／第34-2次調査東区石列／第34-2次調査西区／第34-2次調査西区石列／第34-3次調査北区栗石検出状況／第34-3次南区掘削状況
図版２　第34-4次調査石垣解体前／石垣番号付け作業／石垣番号付け状況
図版３　石垣天端石検出状況／写真測量標定点観測作業／天端石写真測量
図版４　築石１段目解体状況／石垣解体作業／１段目裏込発掘状況／１段目軒丸瓦出土状況／１段目加工石材出土状況
図版５　築石２段目解体状況／２段目鬼瓦出土状況／２段目磁器碗出土状況
図版６　築石３段目解体状況及び土層断面
図版７　高瀬哲郎先生調査指導／県文化財保護審議会調査指導／クロマツ移植先掘削状況／クロマツ根鉢形成作業／クロマツ移植作業／クロマツの運搬作業／第34-4調査区移植後の状況
図版８　吸出し防止マット設置／栗石充填作業／石垣復元作業／天端石までの復元状況／石垣復元完成／復元石垣／クロマツ若木の移植に伴う養生設置／移植後のクロマツ若木
図版９　府内城・城下町第34次調査出土遺物
図版10　府内城・城下町第34次調査出土遺物
図版11　立会Ｅ地点／立会Ｋ地点／立会Ｏ地点／立会Ｑ地点／立会Ｓ地点／立会Ｔ地点／立会Ｕ地点／立会Ｖ地点
図版12　国道197号道路改良事業に伴う立会調査出土遺物

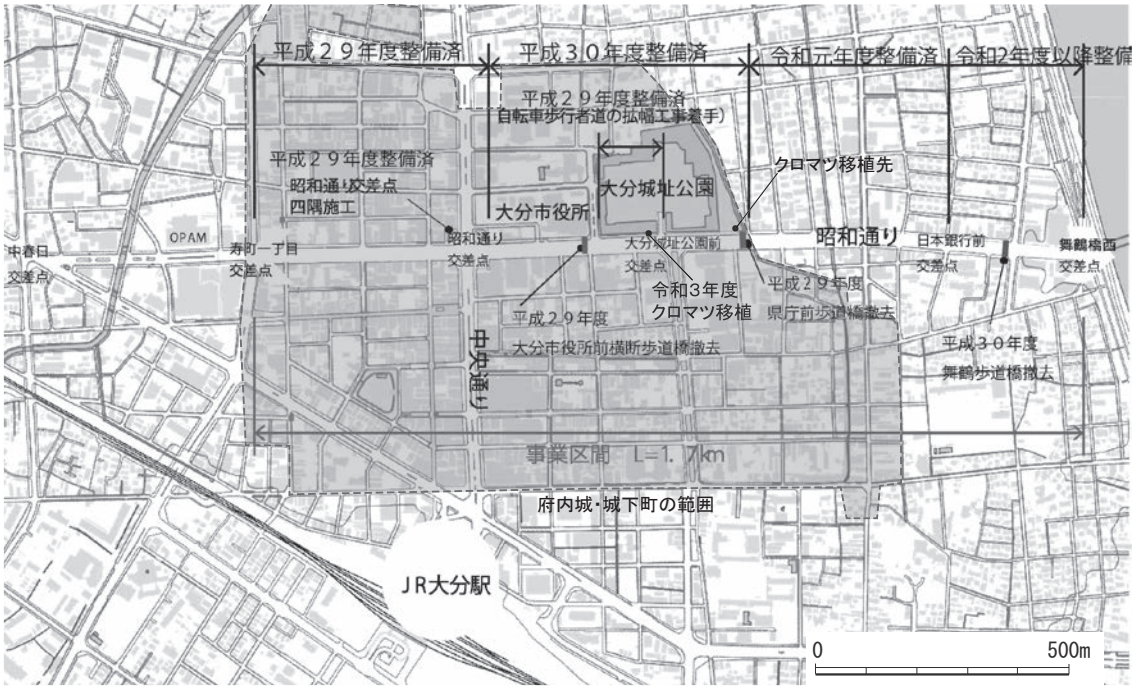
第１章　調査に至る経緯と発掘調査の経過

第１節　調査に至る経緯

国道197号は、県都大分市の中心部を東西に貫く幹線道路で、交通量も多く、また産業・交通・生活を支える大動脈となっている。事業区間である国道197号の寿町交差点～舞鶴交差点間は「昭和通り」と通称される。この間の歩道は、歩行者等の利用が多いものの、所によって歩道の幅員が狭いうえに車道と歩道の段差が生じ、老朽化により歩道面自体にも凹凸が生じ、安全な歩行が困難な状態になっていた。特に県庁前交差点にある樹高約9.5mのクロマツは大正年間に植樹されたものといわれ、根元が大きく膨れ上がって路面に大きな段差を生じ、堀側に曲がって延びた幹が歩行の大きな妨げになっていた。その一方で、その独特な樹形は府内城跡と一体となった景観にマッチしており、地域住民にとっては愛着のあるシンボル的な存在ともなっていた。

こうした状況から、大分県では「大分の街並みを引き立て、落ち着き・品格のある昭和通り」をテーマに、①全体的に統一感のある通り・②歩きやすく、日常的に利用しやすい通り・③住む人にとって誇りに感じられる通り、の３点の整備方針のもと、大分県土木建築部大分土木事務所が事業者となって平成29年度～令和３年度の５ヶ年計画で国道197号（昭和通り）の歩道改良を目的とした改良事業が行われることとなった。特に②については、高齢者や障害者等の安全な利用ができるよう、バリアフリーを重視した計画となっている。事業の主な内容としては、昭和通りに架かる３つの歩道橋（昭和通り交差点歩道橋・大分市役所前横断歩道橋・舞鶴歩道橋）を撤去し、そのうえで安全な歩行空間を確保した歩道を整備し、併せて支障となっているクロマツを大分城址公園の一角に移植する、というものである（第１図）。令和4年現在、当該工事は完了しているが、この歩道再生事業は全国的に高い評価を得て令和元年度にグッドデザイン賞を受賞している。

その一方、昭和通りの大部分は周知の埋蔵文化財包蔵地である「府内城・城下町」に該当することから、計画に係る埋蔵文化財の取扱いについて、関係機関と協議を重ねてきた。その結果、施工の大部分は歩道面の改修程度の軽微なものであるものの、歩道橋基礎の撤去や新規の構造物設置箇所等、一定程度の掘削が避けられない箇所が生じることから、当該箇所については埋蔵文化財保護のための調査が必要との結論に至った。しかし掘削面積は各所とも数㎡～ 10㎡程度と狭小であることから、調査を要する範囲は府内城・城下町の範囲内における工事とし、工事掘削時の立会調査として、当該箇所の埋蔵文化財の状況を確認することとなった。



第１図　国道197号道路改良（歩道改修）事業概要図（1/15,000、大分県土木建築部作成図に加筆）

発掘調査は平成29年度から令和元年度にかけて順次実施した。特に移植するクロマツの根元において、移植のための樹根調査・根鉢形成のための立会調査の際に、石垣の可能性のある石列を確認するなどの成果を挙げることができた。この遺構については当該立会調査の中で記録作成を行い、その上で最終年度の移植実施時にさらに下部を確認する調査を実施して完了する予定であった。しかし、事業者側で詳細な移植計画を検討した結果、作業の安全を確保しつつ移植を実施するためには現状の歩道空間では十分なヤードが確保できないこと、クロマツ周囲の掘削及び移植後の地盤の軟弱化により、昭和通り北側の堀に面した府内城跡の石垣が崩壊する可能性があることから、石垣の一部（延長9.5m、高さ1.15m）を解体した上で移植を実施し、移植後に石垣の復旧を行う計画案が提示された。これに対し、この石垣は大分県指定史跡府内城跡を構成する重要な遺構であることから現状保存すべきことを訴え、事業者側に計画の再検討を求めた。しかし、計画の変更は困難であるとの結論に至ったため、石垣の解体については事前に詳細な記録作成のための測量調査を行い、その上で石垣の解体と解体範囲の本発掘調査を並行して実施すること、解体した石垣は忠実に復元し史跡の価値保全を担保すること、発掘調査終了後は出土品や調査記録の整理と発掘調査報告書の作成を行うこととし、その経費を事業者側で負担することでまとまり、史跡の取扱いについては大分県文化財保護審議会の判断に委ねることとなった。令和4年８月10日の大分県文化財保護審議会で当該計画について審議の結果、石垣の一時解体を伴う移植計画が了承された。

第２節　発掘調査の経過

前節の協議を踏まえ、令和３年８月16日付で事業者から埋蔵文化財発掘調査（本調査）の実施依頼文書が提出され、８月20日付で発掘調査の実施計画及び所要経費見積を回答した。令和３年12月２日には事業者から大分県教育委員会へ大分県指定史跡府内城跡の現状変更許可申請が提出され、移植に先立つ発掘調査の実施を条件に同年12月13日付で許可が出された。発掘調査の実施にあたり、解体石垣の三次元測量を含む発掘作業の実施から記録作成に係る一連の業務を埋蔵文化財発掘調査支援業務として一括して民間調査組織に委託する方針で入札を執行したものの、入札不調となったため、解体石垣の三次元測量を別途測量業者に委託するとともに、発掘調査における記録作成は移植作業を行う造園業者の協力を得て直営で実施することとした。また、石垣の一時解体・復元にあたっては、文化財石垣の解体復元の実績を有する技能者の指導のもとで行うこととし、当該指導業務委託を別途発注した。調査中、安全確保の観点から解体石垣の記録作成を迅速に行う必要が生じたため、石垣解体面の記録作成を写真測量で行うこととし、別途委託業務として発注した。令和３年12月６日に解体に先立つ石垣の三次元測量を実施し、12月15日から石垣の解体及び発掘調査に着手した。令和４年２月13日深夜～２月14日未明にかけてクロマツの移植作業を行い、移植後の記録作成を経て調査地の埋戻し及び解体石垣の復元作業を行った。令和４年２月26日に石垣復元作業を完了し、事業者立会のもとで完了確認を行った。令和４年３月25日に委託業務の成果物の提出を受けるとともに完了検査を実施し、クロマツ移植に係る発掘調査を完了した。この間の発掘調査に係る行政的手続は第1表のとおりである。

なお、調査次数については大分市教育委員会と調整し、両者で共通した調査次数を付しており、令和３年度のクロマツ移植に伴う発掘調査は府内城・城下町第34次調査として実施した。平成29・30年度の立会調査については調査次数を付していないが、第34次調査と同一箇所の調査であることから、時系列は前後するものの平成29年度の樹根調査時の立会調査を第34-1次、平成29～30年度の根回し作業に伴う立会調査を第34-2・3次、移植に伴う本調査を第34-4次調査として扱うこととする。

第1表　府内城・城下町第34次調査に係る法定手続等

調査次数	調査年度	調査期間	法定手続（文化財保護法）		
			本調査施行通知（法99条第1項）	埋蔵文化財発見通知（法100条第2項）	調査終了報告
第34-1次調査（立会調査）	平成29年度	H29. 4.26	－	H29. 6. 8（ 1箱）	H29. 5.12
第34-2次調査（立会調査）	平成29年度	H30. 3.13	－	H30. 3.14（ 6箱）	H30. 3.14
第34-3次調査（立会調査）	平成30年度	H31. 1.18	－	H31. 1.21（14箱）	H31. 1.21
第34-4次調査（本調査）	令和３年度	R 3.12. 6 ～R 4. 3. 8	R 3.11.19	R 4. 3.17（22箱）	R 4. 3.17

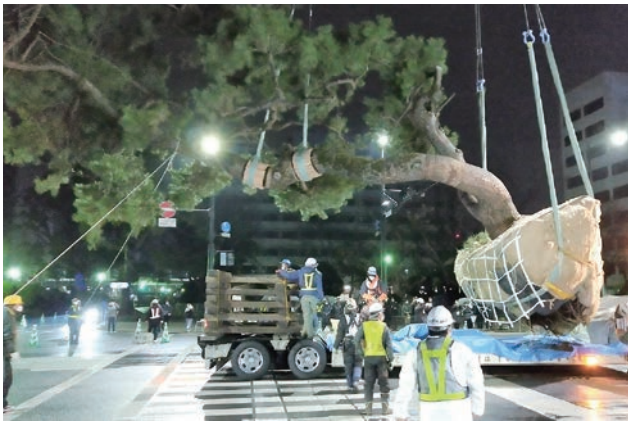
クロマツ移植前（平成29年度・歩道改良前）

クロマツ移植前（令和3年度・歩道改良後

解体石垣の番号付け・丁張設置

下村先生現地指導

石垣解体面の写真測量



クロマツ移植作業

石垣復元状況

クロマツ移植後（令和4年3月）

第３節　整理作業・報告書作成の経過

平成29～30年度に実施した事業全体の立会調査で出土した遺物は、コンテナボックスにして21箱と、調査面積に対してかなり多量であった。この出土遺物の取扱いについて県土木建築部と協議した結果、土木建築部の経費負担により令和元年度に整理作業を行い、事業最終年度に報告書を刊行することとなった。整理作業は府内城・城下町を含む当該年度整理実施事業を一括して「埋蔵文化財センターが実施する埋蔵文化財発掘調査に係る整理作業委託」として発注した。業務は基本作業と資料作成業務からなり、埋蔵文化財センター整理作業棟を作業場所として実施した。委託内容は出土遺物の水洗、出土地点の注記、遺物接合・復元、遺物実測・拓本採取、遺物観察基礎データ作成、遺物実測原図のトレース、遺物写真撮影、及び遺物の区分けや収納等諸作業である。業務では作業工程ごとに調査担当者が完了確認を行い、作業精度の確保に努めた。整理作業は令和元年５月21日～令和２年２月18日にかけて実施し、同日に委託成果物の提出を受け、完了検査を経て終了した。

本調査出土遺物の整理作業は令和４年度に実施した。整理対象はコンテナボックス22箱及び栗石である。作業は平成元年度と同様の方法で委託業務とし、令和４年６月１日～令和５年１月４日にかけて実施し、１月13日に委託成果物の提出を受け、同日の完了検査を経て終了した。

遺構・遺物実測図版作成や原稿執筆、編集等報告書作成業務は整理作業と並行して行い、令和４年12月から原稿を入稿し、３度の校正を経て令和５年３月末に本書を刊行した。これを以て本事業を完了した。

第４節　調査組織の構成

府内城・城下町の発掘調査に係る調査組織は以下のとおりである（所属・職名は調査当時）。

調査主体　大分県教育委員会
調査機関　大分県立埋蔵文化財センター
調査指導　武末純一（大分県文化財保護審議会委員、福岡大学名誉教授）　※令和3年度
　　下村　智（大分県文化財保護審議会委員、別府大学教授）　※令和3年度
　　高瀬哲郎（石垣技術研究機構代表）　※令和3年度

平成29年度　予備調査
調査責任者　阿部辰也（大分県立埋蔵文化財センター所長）
調査総括　江田　豊（大分県立埋蔵文化財センター副所長兼調査第一課長）
調査事務　神田　繁（　同　総務課長）
　　石丸一輝（　同　総務課副主幹）
　　堺井裕史（　同　総務課主事）
調査担当　横澤　慈（　同　調査第一課主査）　※立会調査主担当
　　土谷崇夫（　同　調査第一課主事）

平成30年度　予備調査
調査責任者　江田　豊（大分県立埋蔵文化財センター所長）
調査総括　友岡信彦（大分県立埋蔵文化財センター参事兼調査第一課長）
調査事務　森次正浩（　同　総務課長）
　　石丸一輝（　同　総務課副主幹）　※9月30日まで
　　岡本佳子（　同　総務課主査）　※10月1日から
　　堺井裕史（　同　総務課主事）
調査担当　横澤　慈（　同　調査第一課主査）　※立会調査主担当
　　土谷崇夫（　同　調査第一課主事）　※立会調査担当
　　吉田　寛（　同　調査第二課長）　※立会調査担当

令和元年度　予備調査及び資料整理

調査責任者　江田　豊（大分県立埋蔵文化財センター所長）
調査総括　友岡信彦（大分県立埋蔵文化財センター参事兼調査第一課長）
調査事務　松本昌浩（同　副所長兼総務課長）
岡本佳子（同　総務課主査）※4月25日まで
工藤慶弘（同　総務課専門員）※4月26日から
堺井裕史（同　総務課主事）※11月29日まで
池見佳輔（同　総務課主事）※12月2日から
調査担当　横澤　慈（同　調査第一課主査）※立会調査・資料整理担当
吉田　寛（同　調査第二課長）※整理作業総括、4月25日まで
後藤晃一（同　調査第二課長）※整理作業総括、4月26日から
服部真和（同　調査第二課主任）※整理作業委託監理
整理作業委託受託者　株式会社九州文化財総合研究所（整理作業指導員　永井美香）

令和３年度　本発掘調査

調査責任者　松本昌浩（大分県立埋蔵文化財センター所長）
調査総括　後藤晃一（大分県立埋蔵文化財センター副所長兼調査第一課長）
調査事務　藤原邦夫（同　総務課長）
西森公誠（同　総務課副主幹）
池見佳輔（同　総務課主事）
調査担当　横澤　慈（同　調査第一課副主幹）
植田紘正（同　調査第一課主事）※本調査担当
諸岡初音（同　調査第一課主事）
三次元点群測量・写真測量業務委託　九州建設コンサルタント株式会社（主任技術者　田中　誠）
石垣解体・復元に係る石工指導委託　有限会社エムズ（技術指導者　平川和人）

令和４年度　整理作業・報告書作成

調査責任者　松本昌浩（大分県立埋蔵文化財センター所長）
調査総括　後藤晃一（大分県立埋蔵文化財センター副所長兼調査第一課長）
調査事務　藤原邦夫（同　総務課長）
山田哲也（同　総務課主査）
平田愛香（同　総務課主事）
調査担当　横澤　慈（同　調査第一課副主幹）※整理作業・報告書作成担当
吉田　寛（同　調査第二課長）※整理作業総括
小堀嵩史（同　調査第二課主事）※整理作業委託監理
整理作業委託受託者　株式会社九州文化財総合研究所（整理作業指導員　永井美香）

本発掘調査の実施にあたっては、以下の機関から多大なる御協力をいただいた。
大分県教育庁文化課、大分県土木建築部大分土木事務所、大分市公園緑地課、株式会社栗木精華園

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

府内城・城下町の所在する大分市は、大分県の中部、北は別府湾、東は豊後水道に面し、西は別府市、由布市、竹田市、南は臼杵市、豊後大野市と市境をなしている。大分県の県庁所在地であり、人口は476,556人（令和４年12月31日現在）、大分県の政治・経済の中心となっている。大分市は、由布岳から発する大分川と、祖母山から発する大野川が別府湾に流れ込む、この下流に位置し、沖積作用で形成された広大な平野が広がっている。この平野を囲むように、高崎山や霊山山地、佐賀関山地といった標高400～800m級の山地が連なっている。これら山地は開析が進み、河川流域に河岸段丘や小規模な谷底平野が発達している。大分川・大野川河口部の三角州上に市街地が形成されている。

鉄道は福岡県北九州市小倉から大分市・宮崎市を経て鹿児島市へ至るＪＲ日豊本線に、福岡県久留米市に至るＪＲ久大本線と、竹田・阿蘇を越えて熊本に至る豊肥本線が大分駅で分岐する。道路は北九州市小倉から東九州を経由して鹿児島市に至る国道10号に、大分から佐田岬半島を経て高知市へ至る国道197号、大分と久留米市を結ぶ国道210号等が交わる、交通の要衝となっている。また、大分港からは神戸港と結ぶ旅客フェリーや、博多港や神戸港、中国・上海港や韓国・釜山港を結ぶコンテナ航路が就航している。

産業は昭和39年（1964）の新産業都市指定を機に臨海部に工業地域が発達し、製造業を中心に第２次産業が盛んである。経済産業省の2017年工業統計調査では大分市の製造品出荷額等は九州第１位となっている。

第２節　歴史的環境

大分平野周辺において、旧石器時代の遺跡は台地上や丘陵部に立地し、平野部ではほとんど確認されていない。縄文時代では、大分川河川敷遺跡（25）で前期～晩期の土器や土偶、石棒が採集されている。また、中世大友府内町跡（14）や下郡遺跡群（26）、若宮八幡宮遺跡（16）等から、後期～晩期を中心とした土器が出土している。

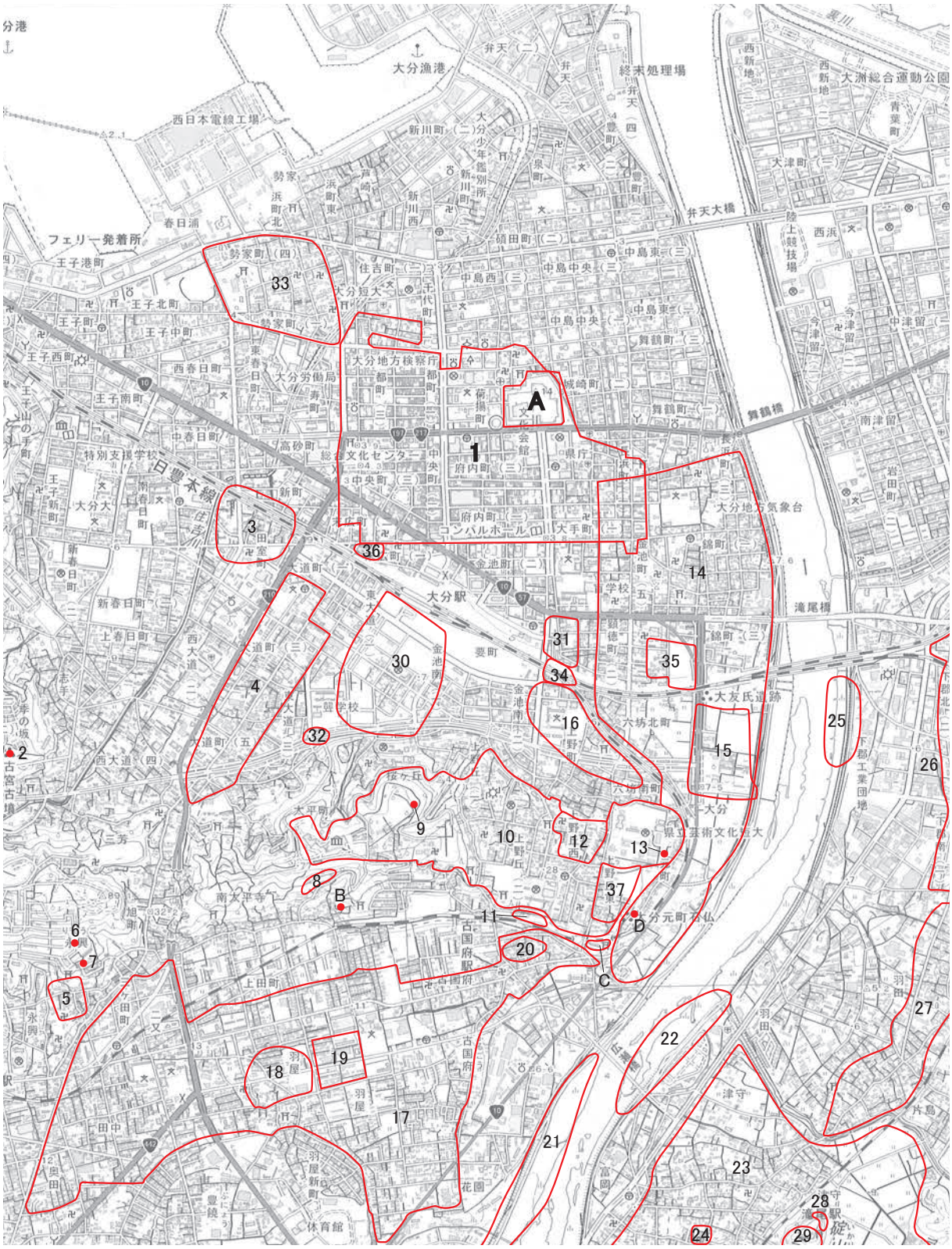
弥生時代では、古国府遺跡群（17）で前期の溝が確認されている。下郡遺跡群（26）は中期・後期に大規模な集落が出現する。また、旧河道からは多量の木製品や動物遺体が出土している。東大道遺跡（32）からは後漢鏡片が出土している。

古墳時代では、上野丘陵東端に前方後円墳である大臣塚古墳（13）、丘陵西方に前方後円墳の千人塚（6）、千人塚のそばに円墳の弘法穴古墳（7）が築かれ、丘陵斜面には南太平寺横穴墓群（8）や岩屋寺横穴墓群（11）等の横穴墓が形成される。集落では前期末の方形区画溝を検出した古国府遺跡群（17）や、前期の環溝や木製臼が出土した大道遺跡群（30）、前～中期を中心とした下郡遺跡群（26）、前～中期の集落で、龍とみられる絵画土器が出土した東田室遺跡（3）、後期の石製玉類製作遺跡の若宮八幡宮遺跡（16）等がある。

古代の遺跡としては、まず７世紀後半に築造された古宮古墳（2）が挙げられる。横口式石槨をもつ特異な古墳で、壬申の乱で活躍した大分君恵尺の墓とも推定されている。古国府遺跡群（17）では７世紀代の「コ」字形建物配置をもつ大型掘立柱建物が検出され、官衙的な施設と推定されている。百済系の瓦が採集された永興遺跡（5）、国司館との関連が指摘される竜王畑遺跡（37）、８～９世紀の版築基壇を持つ上野廃寺を含む上野遺跡群（10）、さらには上野丘陵の南東斜面に造顕された元町石仏（D）や岩屋寺石仏（C）等、上野丘陵一帯に重要な遺跡が展開する。

中世には豊後守護として入封した大友氏のもと、大分川左岸自然堤防上に遺跡が展開する。14世紀初頭に成立した蒋山万寿寺跡（15）を皮切りに、大友館跡（35）とその周囲に展開した都市・中世大友府内町跡（14）からは､15～16世紀を中心に貿易陶磁器やキリシタン遺物等多彩な資料が出土しており、一部は重要文化財に指定されている。上野丘陵にある上野館跡（12）も大友氏の居館で、天正14年（1586）の豊薩戦争に際して土塁が大規模化するなど、当時の緊迫した情勢を窺わせる。下郡遺跡群では方形区画を持つ居館群が確認され、大友氏に従属した武士の居住域と推定されている。

文禄２年（1593）に大友吉統が豊後を除国された後、慶長2年（1597）に入封した福原直高が、新たに府内城を築城する。その後竹中重利が城郭の主要施設と城下町の建設を進めている。日根野氏の後、幕府直轄領を経て松平忠昭が入り、以後明治４年（1871）の廃藩置県まで大給松平氏が支配している。明治５年（1872）には城内に県庁が置かれ、昭和37年（1962）に県庁が現在地に移転後、翌昭和38年（1963）に大分県指定史跡に指定された。昭和41年（1966）には本丸・西之丸・東之丸及び帯曲輪一帯が城址公園として整備され、市民の憩いの場となっている。



1. 府内城跡　2. 古宮古墳(国史跡)　3. 東田室遺跡　4. 大道条里跡　5. 永興遺跡　6. 千人塚　7. 弘法穴古墳　8. 南太平寺横穴墓群
9. 飯盛塚古墳　10. 上野遺跡群　11. 岩屋寺横穴墓群　12. 上野館跡　13. 大臣塚古墳　14. 中世大友府内町跡(一部国史跡)
15. 蒋山万寿寺跡(国史跡)　16. 若宮八幡宮遺跡　17. 古国府遺跡群　18. 羽屋園遺跡　19. 金剛宝戒寺跡　20. 岩屋寺遺跡
21. 大分川河川敷第1遺跡　22. 大分川河川敷第3遺跡　23. 津守遺跡　24. 松平忠直津守館跡　25. 大分川河川敷第4遺跡　26. 下郡遺跡群
27. 羽田遺跡　28. 碇山横穴墓群　29. 碇山山頂遺跡　30. 大道遺跡群　31. 金池南遺跡　32. 東大道遺跡　33. 勢家遺跡　34. 上野町遺跡
35. 大友館跡(国史跡)　36. 末広遺跡　37. 竜王畑遺跡

指定文化財
A. 府内城跡(県・市史跡)　B. 伽藍石仏(市)　C. 岩屋寺石仏(県史跡)　D. 元町石仏(国史跡)

第2図　府内城・城下町と周辺の遺跡（国土地理院発行2万5000分の1地形図「大分」に加筆）

第３章　発掘調査の成果

第１節　試掘調査の概要

国道197号道路改良（歩道改修）事業の一環として実施した府内城・城下町第34次調査は、国道197号の大手前（県庁前）交差点傍にある。国道197号は府内城の東之丸・西之丸と三ノ丸を隔てる内堀に沿ってほぼ東西方向に走っており、調査地はこの内堀の南端部にあたる。なお、大手前の土橋から東之丸側の内堀は西之丸側よりも南に張り出しており、この部分は堀の南半部は明治６年（1873）に埋め立てられている。

発掘調査はクロマツの移植に伴い、その周囲の掘削を行うことから実施したものである。樹木の移植は５ヶ年に及ぶ長期計画であり、発掘調査も移植作業工程に応じ、①樹根調査時（第34-1次調査）、②根巻き・根鉢形成時（第34-2・3次調査）、③クロマツ本体の移植時（第34-4次調査）、に順次実施した。以下、調査次ごとに概要を報告する。

第２節　第34－１次調査の概要

府内城・城下町第34-1次調査は、クロマツ移植のための樹根調査に伴い、平成29年４月26日に立会調査として実施した。樹根調査は地中の根の張り具合を確認するためのもので、クロマツの根本部に、約1m×5mの東西方向に細長いトレンチを設定し、樹木医も立会の下で造園業者の作業員により人力で掘り下げを行った。舗装盤及び歩道造成時の盛土を40～50cmほど除去した時点で樹根の横方向への広がりが確認された。樹根の深さを確認するため、樹根の隙間をさらに掘り下げたところ、樹根の下に東西方向に続く石列を確認した。しかし、クロマツを傷めないため樹根を残しながらの掘削であったため、記録作成が十分に行えないことから、石列を確認した状況の写真撮影だけ行い、遺構の詳細な記録作成は後日に期すこととして調査を終了した。第34-1次調査で出土した遺物は、陶磁器、瓦等、コンテナボックス１箱であった。

第３節　第34－２・3次調査の概要

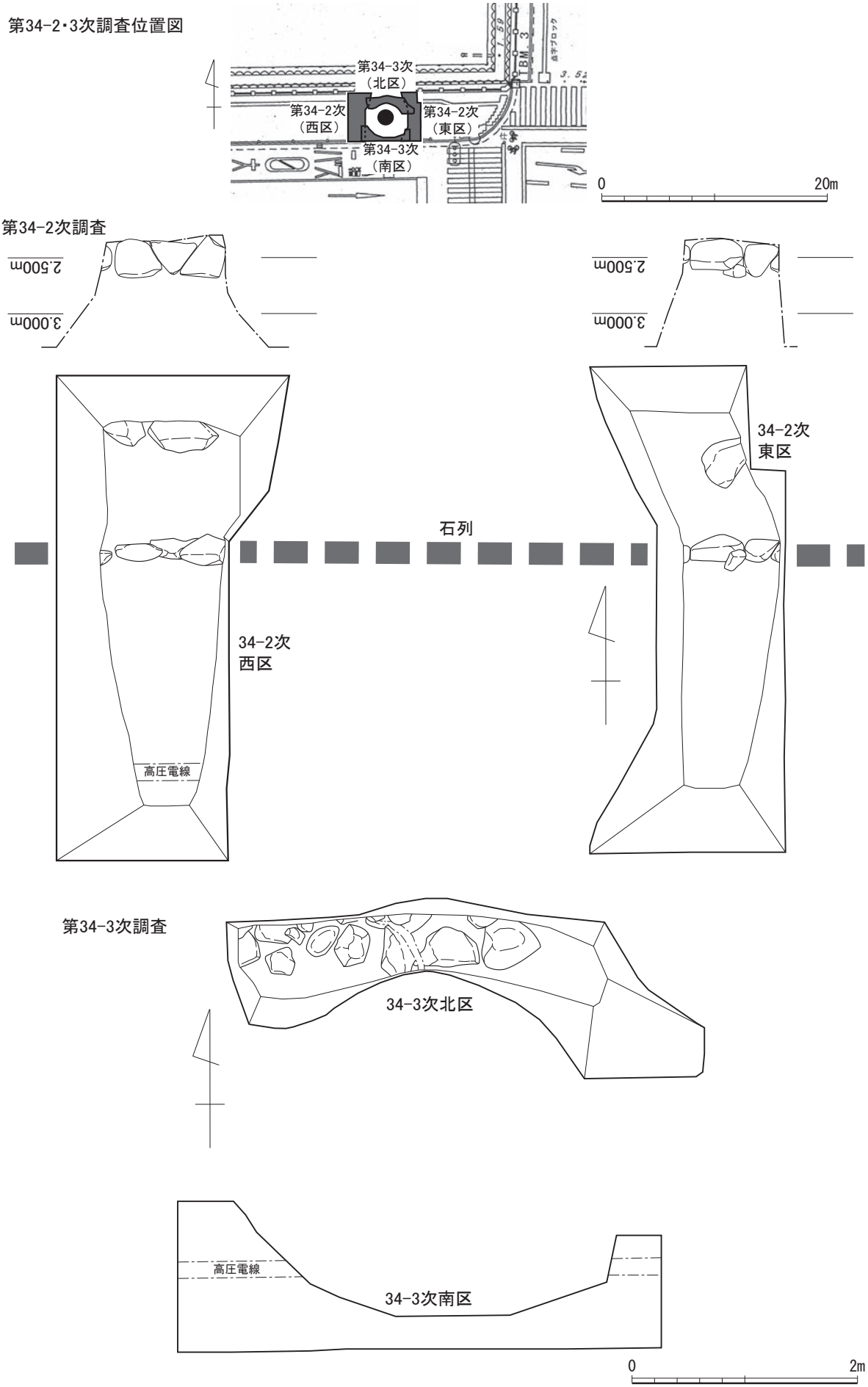
府内城・城下町第34-2・3次調査は、クロマツ移植のための根巻・根鉢形成作業に伴い実施したものである。移植のために樹根を一定範囲で切断して根鉢とし、樹木が枯死しないよう根の切断箇所周囲の樹皮を環状に剥いてそこから新たに毛細根を発生させ、来るべき移植に備えるための作業である。

第34-2次調査は、クロマツの東・西側の根巻作業に伴い、平成30年３月13日に立会調査として実施した。掘削は樹木医も立会の下で造園業者の作業員により人力で掘り下げ、瓦などの出土遺物を回収しながら慎重に行った。掘削は地表下約90 ～ 100cmで、約90cmで地山砂層に達する。遺構は第34-1次調査で確認していた石列を再度検出した他、東区の北端近くで石垣築石の転石、西区北端部で栗石の一部を検出した（第３図）。なお、樹木の乾燥を防ぐことから掘削後直ちにシートで養生する必要があったため、調査は遺構の記録を最優先とし、堆積層序の観察は十分に行うことができなかった。

石列は東区・西区ともに確認でき、一直線に続いていることが分かる。東区・西区とも石列は石材１段で構築される。確認した石材は、西区は４点、東区は５点で、東区では築石の間に間詰石のようなやや小ぶりの石材が１点乗っているのが確認された。軸線はN-89°-Eで、ほぼ東西方向に延びている。石材の高さは30～40cmを測り、上端が揃った横目地が通る積み方である。また、北側に平坦な面が揃うように積んであり、内堀側の北面を意識した構築であると考えられる。背面に裏込めは確認できないが、北側を意識した構築であること、横目地の通った積み方で、１点ではあるが間詰石の可能性のある石があることから、石垣の基底部で上部が削平されたものである可能性が考えられる。近世府内城に関する遺構ではあるが、確実に石列に伴う遺物がないことから、構築時期は明らかにできない。

調査区からは多量の瓦を中心に、土器、陶磁器等がコンテナボックス６箱出土した。遺物の出土地点には差があり、石列から北側で瓦や陶磁器が多量に出土し、南端部付近は出土が希薄であった。

第34-3次調査は、クロマツの北・南側の根巻作業に伴い、平成31年１月18日に立会調査として実施した。第34-2次調査同様遺物を回収しながら慎重に掘り下げ、石材が出土した時点で掘削を止め、石を残しながら約１m掘り下げた。遺構は北区で現存石垣の裏込め層を確認したが、南区では確認されなかった。裏込め層は東西約2.7m、南北約0.6mの範囲に30～50cm大の礫が集中しており、この北区を中心に瓦、陶磁器等の遺物が出土した。出土量はコンテナボックスで14箱であった。



第3図　府内城・城下町第34-2・3次調査実測図（1/500・1/50）

第４節　第34－4次調査の概要

府内城・城下町第34－4次調査は、クロマツの移植に伴い、国道197号北端の石垣を一部解体する必要が生じたことから、この石垣の解体範囲を中心に発掘調査を実施したものである。第１章でも触れたとおり、この国道197号北端の石垣は、大分県指定史跡府内城跡を構成する重要な遺構であり、事業者から大分県教育委員会へ県指定史跡の現状変更許可を申請し、その許可後に発掘調査に着手した。

発掘調査はまず、石垣解体に先立ち、石垣解体箇所の詳細な記録作成のため三次元測量を実施した（第４図）。測量は高圧洗浄機を用いて石垣を洗浄した後、地上型3Dレーザ計測機を設置して観測を行い、取得した地形データを設置した標定点を基に合成・解析を行った。測量の計測密度は点間１㎝とした。

石垣の三次元測量後、石垣解体の準備作業として解体する石材に番号付けを行った。番号は、築石にＡ、間詰石はＢとし、解体する順番に応じてそれぞれに１番から番号を付与した。また、復元のために石垣に方眼入れを行い、石材同士の接点を確認できるようにした。

これら準備作業が終了した後、石垣上部の舗装及び後世に追加されたコンクリートや板石を除去して天端石を露出させた状態で、石垣解体面の記録作成を行った。解体面の記録作成は、クロマツ周囲の土壌が砂質土の軟弱地盤であり、最終的に地表から1.5m余り掘り下げることで周囲が崩壊する危険があること、クロマツの根を長期間大気に暴露することでクロマツ自体に影響が生じる懸念があること等、迅速な記録作成が求められたため、写真測量により記録作成を効率的に行うこととした。写真測量はまず石垣周囲に標定点を打設し、標定点が３点以上写る画角で石垣平面に対して水平を保ちながら一定高度で撮影し、撮影画像は標定点を基に合成してオルソ画像を作成し、平面図を作成した（第５図）。また解体する石材のレベル測量を行い、その高さを記録した。

石垣の解体は文化財石垣に対する十分な知識と技能を持った石工の指導の下に１段ごとに行い、築石解体後に人力により背面土壌の発掘を行った。築石１段の解体が終わるごとに解体平面の写真測量を繰り返した。築石の解体は２段、解体面の写真測量は３回実施した。解体した石材は大分城址公園内に搬入・仮置きし、築石については採寸とともに石材や形状の記録を行った（第２表）。

第2表　府内城・城下町第34－4次調査石垣築石一覧

築石番号	使用部位	石　　材	法量（cm）			天端高（m）	加工痕	形　状	備　考	解体
			最大縦	最大横	控え長					
A1						－				×
A2						－				×
A3						－				×
A4						3.005				×
A5	築石	安山岩	40	60	55	3.300	半裁	楕円形転礫		○
A6	築石	安山岩	20	40	40	2.985		不定形		○
A7			30	40	45	2.884		転礫		○
A8			60	60	60	－		転礫		○
A9	築石	角閃安山岩	35	25	45	－		転礫		○
A10	築石	安山岩	35	45	50	2.953				○
A11						2.823				×
A12	築石	安山岩	40	65	50	2.872	半裁	転礫		○
A13						2.929				×
A14	築石	角閃安山岩（別府石）	50	90	60	2.933	コブ取り	転礫	風化激しい	○
A15	築石	安山岩	30	40	55	2.937	コブ取り			○
A16						2.923				×
A17	築石	安山岩	35	40	60	2.874	コブ取り	転礫		○
A18						2.790				×
A19						－				×
A20						－				×
A21						－				×
A22						2.565				×
A23						2.531				×
A24	築石	安山岩	40	60	60	2.556	なし	転礫	風化激しい	○
A25	築石	角閃安山岩（別府石）	45	55	70	2.558		築面の整形		○
A26	築石	角閃安山岩（別府石）	35	45	65	2.564		コブ取り		○
A27						2.531				×
A28	築石	安山岩	45	45	60	2.534				○
A29	築石	安山岩	70	90	70	2.789		転礫		○
A30	築石	安山岩	50	60	90	2.418		コブ取り		○
A31						2.478				×
A32	築石	安山岩	40	40	55	2.591		長方形		○
A33	築石	角閃安山岩	70	60	50	2.615	なし	転礫		○
A34	築石	角閃安山岩（別府石）	50	50	70	2.743	なし	転礫		○
A35						2.467				×
A36						－				×
A37						－				×
A38						－				×
A39						－				×
A40						2.138				×
A41	築石	安山岩	60	65	70	2.370	半裁・コブ取り	転礫		○
A42	築石	角閃安山岩	55	40	65	2.202	なし？	転礫		○
A43	築石	安山岩	45	55	70	2.262	割面あり	転礫		○
A44	築石	安山岩	40	40	75	2.245		転礫		○
A45	築石	安山岩	45	45	75	2.342				○
A46	築石	角閃安山岩（別府石）	50	60	55	2.150		転礫	風化激しい	○
A47						2.039				×
A48	築石	安山岩	40	75	55	2.217	なし	転礫		○
A49	築石	角閃安山岩（別府石）	30	40	75	2.318	なし	転礫		○
A50	築石	安山岩	50	80	65	2.412	コブ取り	転礫		○
51						2.311				×
52						－				×
53						－				×
54						－				×
55						2.017				×
56						1.848				×
57						1.926				×
58						1.934				×
59						1.851				×
60						1.930				×
61						1.727				×
62						1.896				×
63						1.976				×
64						2.047				×

石垣（第4・5図）

発掘調査で解体を行った、内堀南側の石垣である。調査範囲は内堀側中段に設けられたコンクリートテラスより上部で、解体調査範囲は東西約12.6m、南北約1.2m、高さは最大で約1.4mである。発掘調査ではまず石垣天端石の上に付加された板石やコンクリートを除去した後、天端石の状況を記録し、順次築石の解体を行った。解体した築石は３段である。

築石は粗割した程度の割石や角が取れて丸みをもつ転礫を用いており、矢穴を持つ石材は認められない。石材は安山岩及び角閃安山岩が主体で、角閃安山岩には赤みがかった、いわゆる別府石と呼ばれる石材も見られる。これら石材は由布川渓谷～高崎山～別府一帯で採取できるものである。築石は乱雑に積み上げられており、布積みのような規則性は認められない。積み上げの角度は15.5度を測る。また、間詰石は所々で脱落して間隙が生じており、そこにコンクリート等が差し込まれているところも随所に認められた。

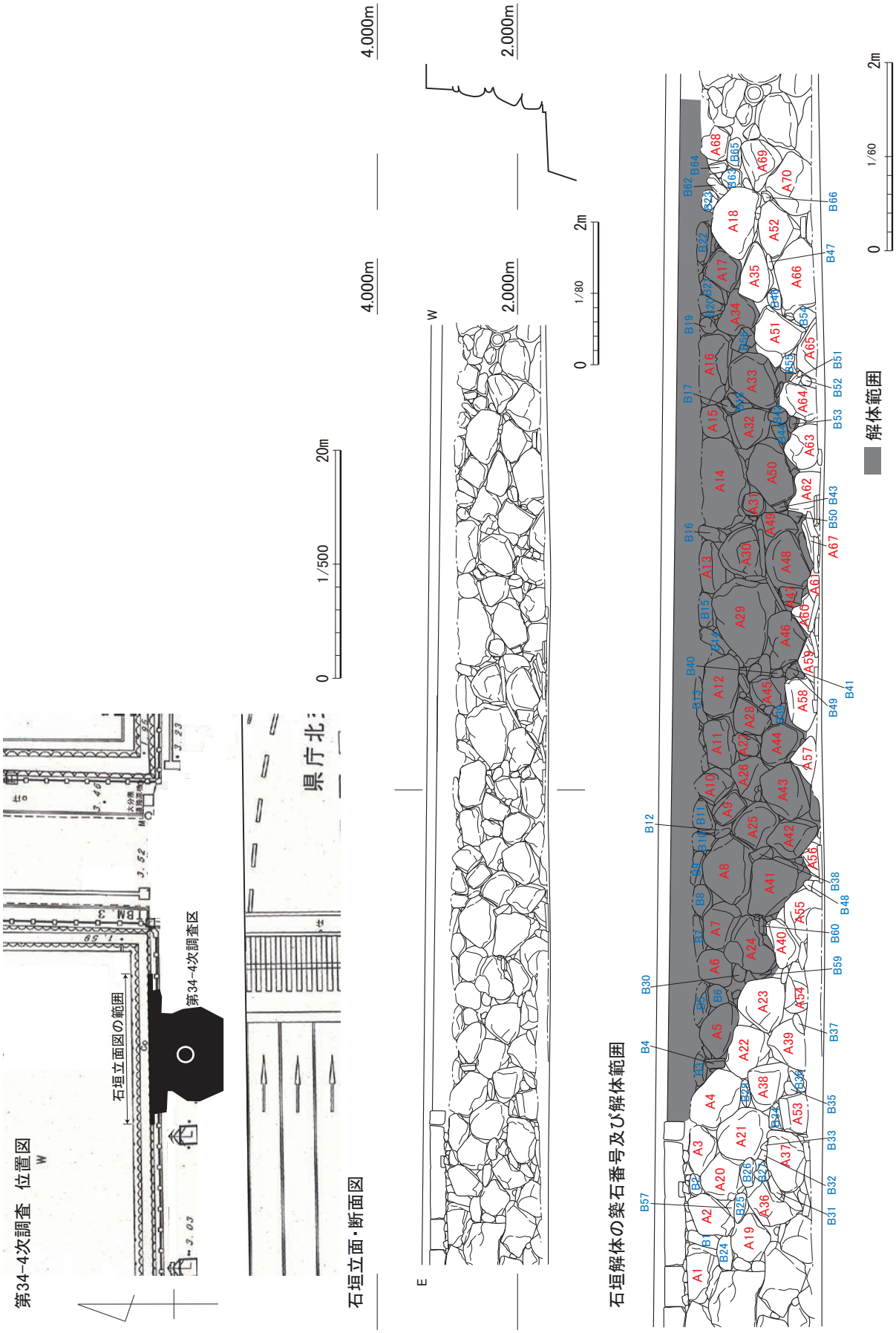
石垣背面の土層は、上部の道路造成に伴う盛土層（１～２層）の下に、厚さ約15～20㎝の地山砂による盛土（３層）が見られる。この層は石垣１段目の背部堆積層であるが、明確な栗石は認められず、近代の陶磁器やガラスを含んでいることから、国道建設時に整地されたものであろう。４層は厚さ40㎝の褐色を呈した砂質土層で、築石２段目～３段目上部の背部堆積層にあたる。層中には60㎝大の石垣廃石材とみられる礫や栗石を散発的に含むものの、裏込め層というほどの密度はない。発掘中に近世の遺物とともに近代の陶磁器等も出土しており、近代以降の積み直しの際に充填された層である可能性が高い。また、瓦も多量に出土しており、不要になった瓦を裏込め材に転用したものとみられる。第34-2・3次調査で瓦等が多量に出土したのもこの層であろう。５層は築石３段目下部～４段目の背部層で、20 ～ 60㎝大の礫を主体とする裏込め層である。第５図の築石１段目解体後（＝2・3段目上部）では築石背部の小礫はまだ散発的にしか見られないが、２段目解体後（＝４段目上部）では小礫が密に分布している状況が分かる。拳大の栗石がしっかり嚙み合った状況が認められることから、近世石垣の裏込め層とみてよい。以上の所見から、解体調査した石垣はほぼ近代以降に積み直されたものであり、近世以前のものは４段目以下に残っている可能性が高いといえる。

クロマツの移植と石垣の復元、クロマツ若木の移植への対応

クロマツの移植は令和４年２月12日深夜から２月13日未明に行われた。国道197号は片側３車線の計６車線であるが、そのうちの西行きの１車線を除いて５車線を封鎖し、220ｔ吊の大型クレーンでクロマツを吊り上げ、47ｔ積トレーナーで城址公園へ運搬するという大掛かりな作業となった（図版４）。移植当日は夜間でかつ雨天にもかかわらず、多くの市民が様子を見守るなど、関心の高さを窺わせた。移植終了後、クロマツ下部の遺構の有無確認を行う予定であったが、根鉢から多量の土砂が落下しており十分な確認を行うことができなかった。しかし、堆積土砂はほぼ地山砂とみられ、また壁面でも明確な遺構は認められなかったことから、移植後の現況を記録し、発掘調査を終了した。

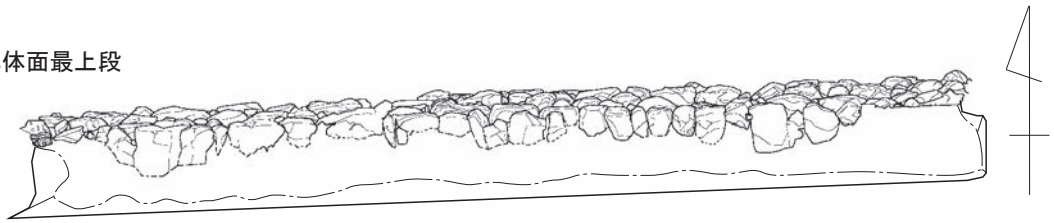
石垣の復元は、クロマツ移植元掘削部を埋戻した後、調査前の測量図や写真等の記録を基に、石垣技術者の指導の下で実施した。築石は解体したものを再度積み直したが、栗石については円礫が多く石材同士の嚙み合わせが弱いため、解体材を再度充填した場合、石垣の強度を保てず崩壊する懸念があったため、栗石は割石の新材を充填する方針をとった。また、栗石と背面盛土の境に不織布マットによる吸出し防止材を設置し、土砂の流出を防ぐこととした（図版５）。

石垣の復元は令和４年２月26日に終了し、３月８日に関係者が集まって復元の完了確認を行ったが、今度はクロマツの移植元に、新たに城址公園前歩道にあるクロマツ若木を持ってきて移植する計画があることが分かったため、その取扱いについて再度協議を行った。石垣復元箇所への新たな樹木の移植は石垣への影響を生じさせるものであり望ましくないことではあったが、石垣への影響防止策を施したうえで移植を実施することとなった。移植にあたっては、石垣とクロマツの間にコンクリートブロックによる障壁を設置（図版５）し、防根忌避剤を石垣側に散布することで、石垣への影響の軽減を図ることとした。また、クロマツの移植にあたって復元石垣への影響を確認するため、移植時には再度立会調査を実施することとした。移植は令和４年３月14日～３月15日に実施し、これをもって調査を完了した。

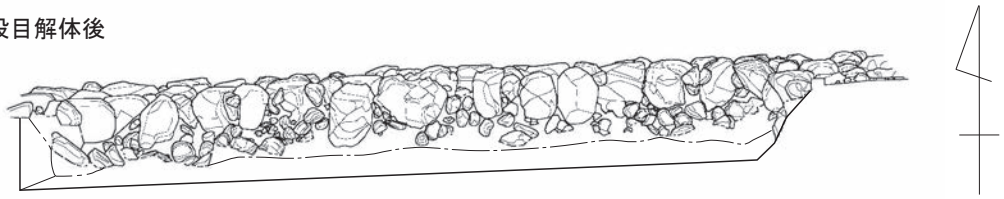


第4図　石垣立面図及び石垣解体範囲と石材番号（1/500・1/80・1/60）

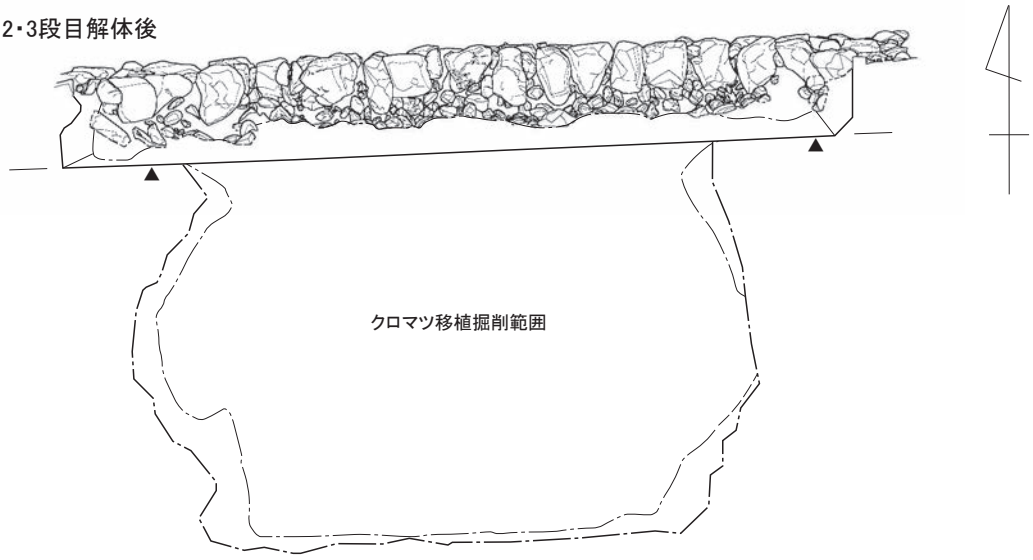
解体面最上段



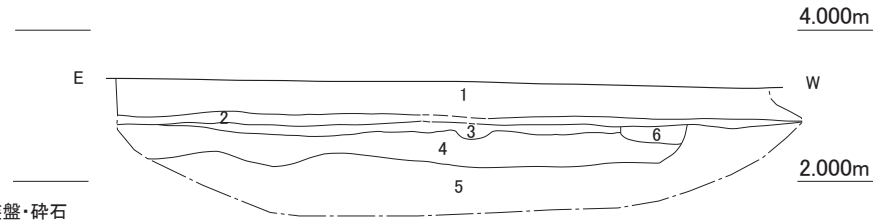
築石1段目解体後



築石2・3段目解体後



土層断面図



1. 舗装盤・砕石
2. 赤褐色粘質土（路床盛土）
3. 盛土
4. 褐色砂質土　粘性なし、60cm大の礫を含む
5. 栗石の裏込層　20～60cm程度の礫主体
6. 撹乱土

0　5m

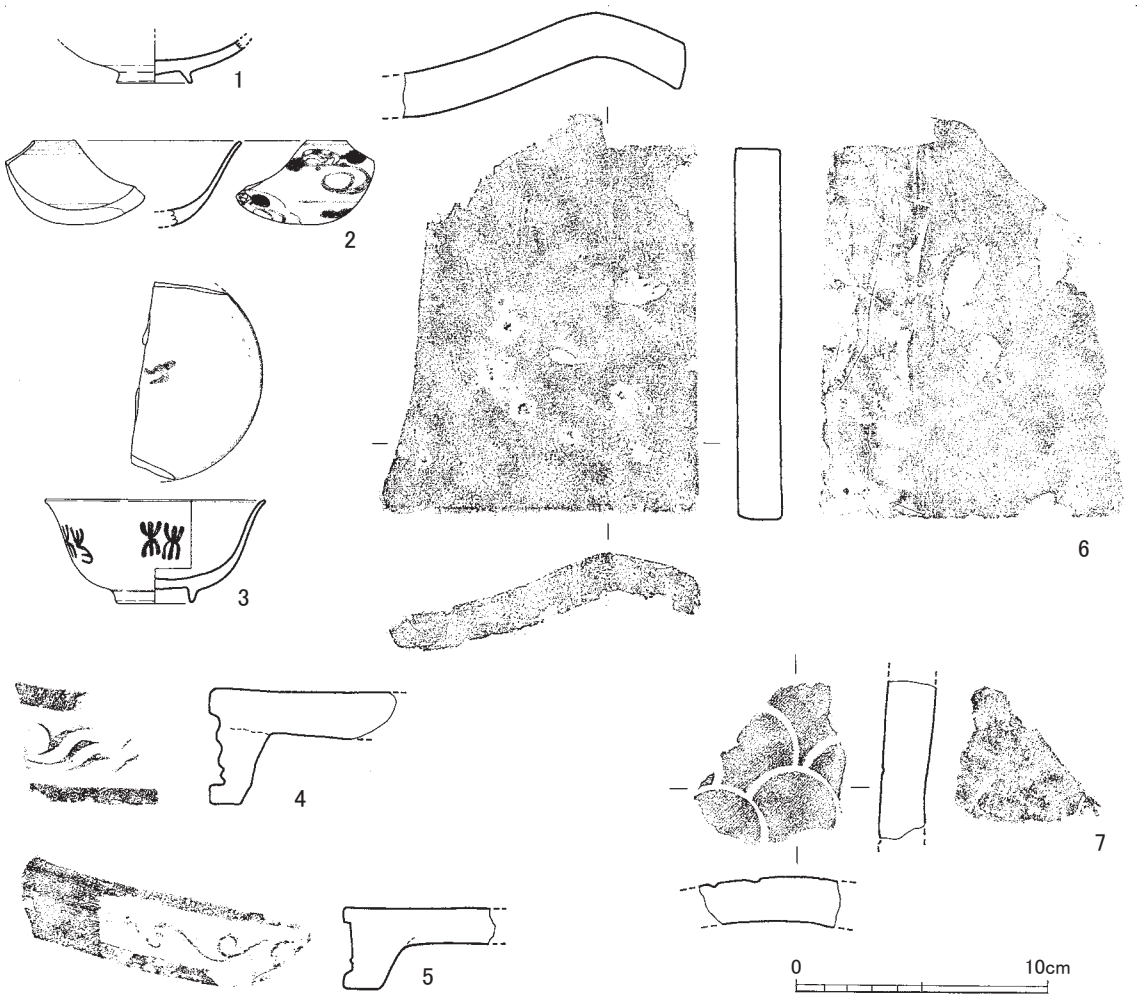
第5図　石垣解体面実測図・土層断面図（1/100）

第５節　出土遺物

府内城・城下町第34次調査の出土遺物を第６～18図に示す。

第６図は第34-1次調査出土遺物である。１は関西系施釉陶器の小碗底部。2・3は瀬戸美濃産染付磁器端反碗で、３は外面に隷字体文を施す。4・5は軒平瓦で､4は中心飾りは不明ながら２段の唐草文を持ち、吉田寛分類のＲ群に該当する[1)]。５も中心飾りを欠く。６は桟瓦である。７は鯱瓦で、ヘラ描きの連弧文で鱗を表現する。

第７～10図は第34-2次調査出土遺物である。８は染付磁器の瓶で、内面は露胎となる。９は瀬戸美濃産染付磁器の端反碗で、外面には隷字体文をあしらい、口縁部には鉄漿を施す。10は肥前産染付磁器の碗で、外面に雪輪文を施す。11～16は軒丸瓦である。巴文はいずれも左巻きで、13・16は尾部が接合する。11は巴文の外側に12個の珠文を配する。13は瓦当部の接合部に補強のための刻みを施す。17・18は軒平瓦である。17は三葉文の中心飾りに均整唐草文を配する。吉田分類のＤ-2群に該当する。18は唐草文と蔓草？を配するが中心飾りを欠く。吉田分類のM群か。19～23は丸瓦である。19・20は長さ32cm前後、幅16.5cm前後のサイズである。22・23はそれよりも小さく、長さ25.5cm、幅12～13cm前後を測る。24～26は平瓦である。



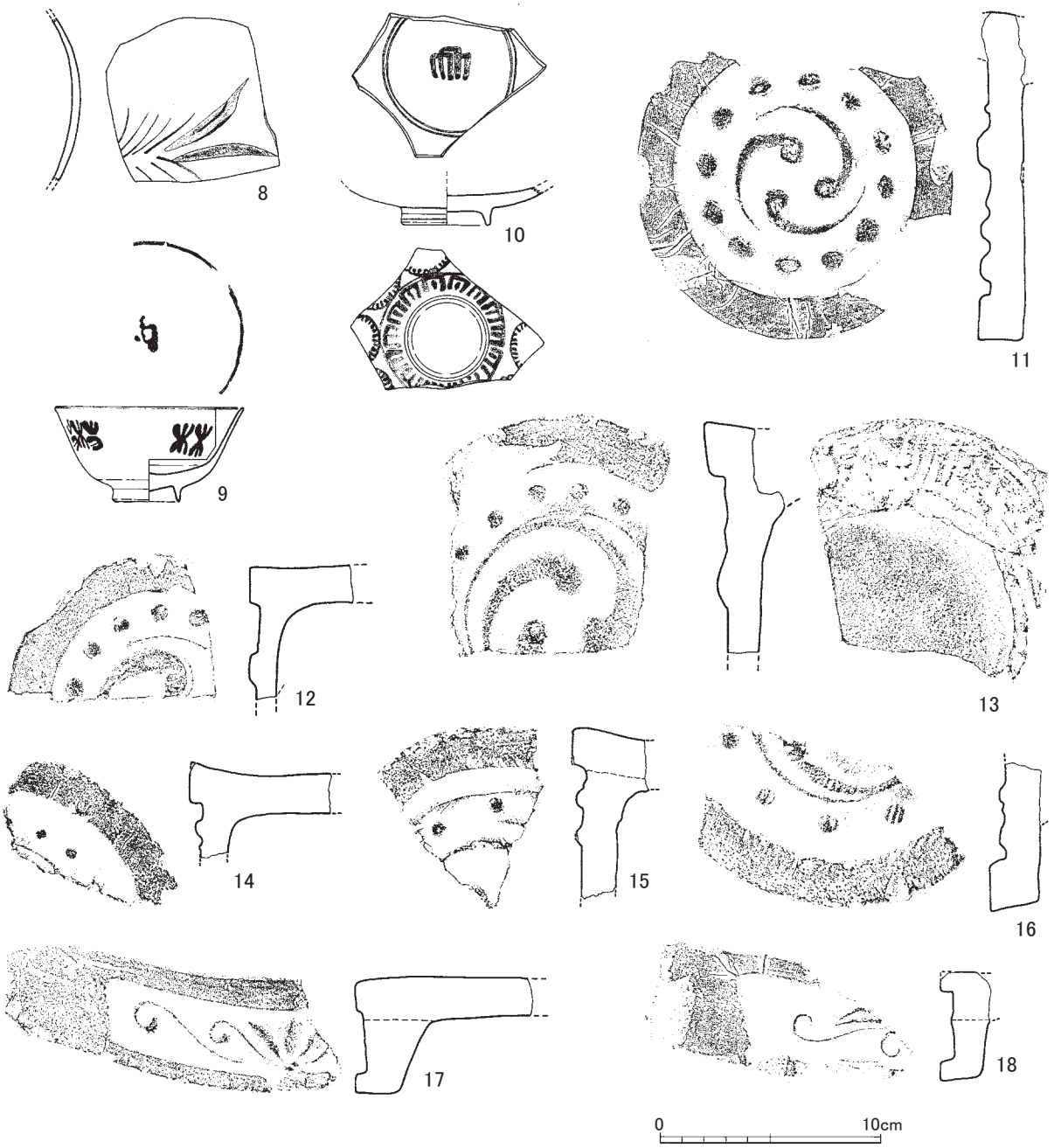
第6図　府内城・城下町第34－1次調査出土遺物実測図（1/3）

1）吉田　寛2003「近世府内城・近世府内城下町跡出土瓦の編年的研究」『山口大学考古学論集　近藤喬一先生退官記念論文集』、近藤喬一先生退官記念事業会
以下、瓦の分類は同文献による。

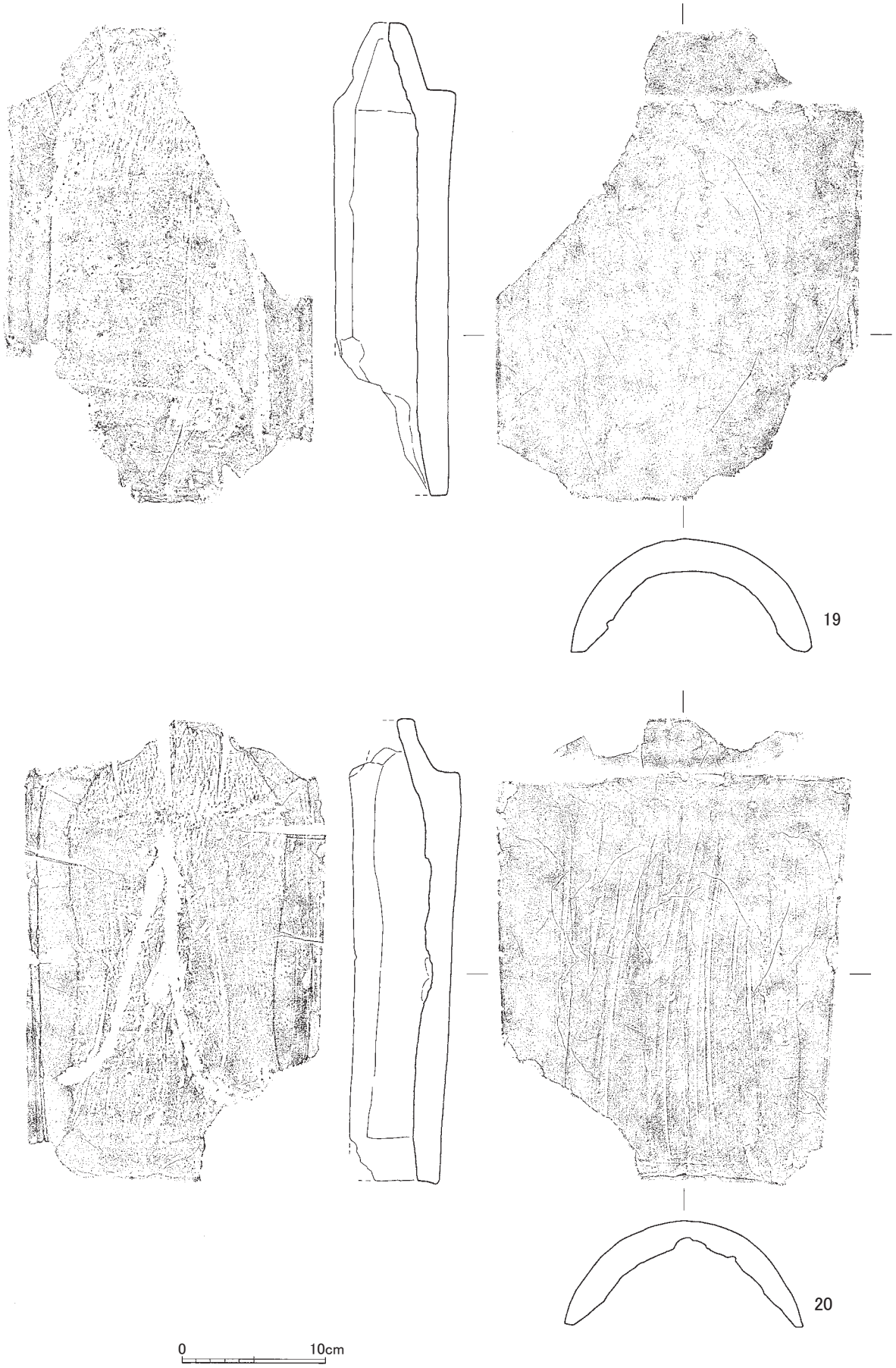
第11・12図は第34-3次調査出土遺物である。27は施釉陶器の鉢の底部。28は肥前系染付磁器皿で、口縁部は輪花状となる。29・30は軒丸瓦で、29は右巻き巴文、30は左巻き巴文を中心に配し、その外周に珠文を施す。31 ～ 33は軒平瓦で、31・32は五葉の笹状文を中心飾りとする吉田分類A類、33は雄蕊状文の中心飾りに唐草文と蔓草を配するもので、吉田分類E群古段階に該当する。34は丸瓦、35は桟瓦である。

第13～18図は第34－4次調査出土遺物である。36は肥前系染付磁器碗、37は型紙摺絵の染付磁器碗、38は染付磁器皿である。39は肥前系青磁の盤。40は瓦質土器の風炉。41は壁土で胎土にスサを含む。42・43は軒丸瓦で、42は左巻き巴文の周囲に珠文を配する。44は小菊瓦で、第34-2次調査出土品と第34-4次調査で出土した瓦当部が接合した。45～49は鬼瓦の破片である。45は主文様部の破片とみられるがその意匠は明らかにできない。46～49は袖部の破片で、背面側には細かいケズリが見られる。50～52は丸瓦、53～55は平瓦である。56は丸瓦であるが、50～52に比べサイズが小さい。57は熨斗瓦である。58は切隅瓦で、瓦当部は無文となる。59・60は加工石材である。いずれも側面に粗いノミ痕が残る。

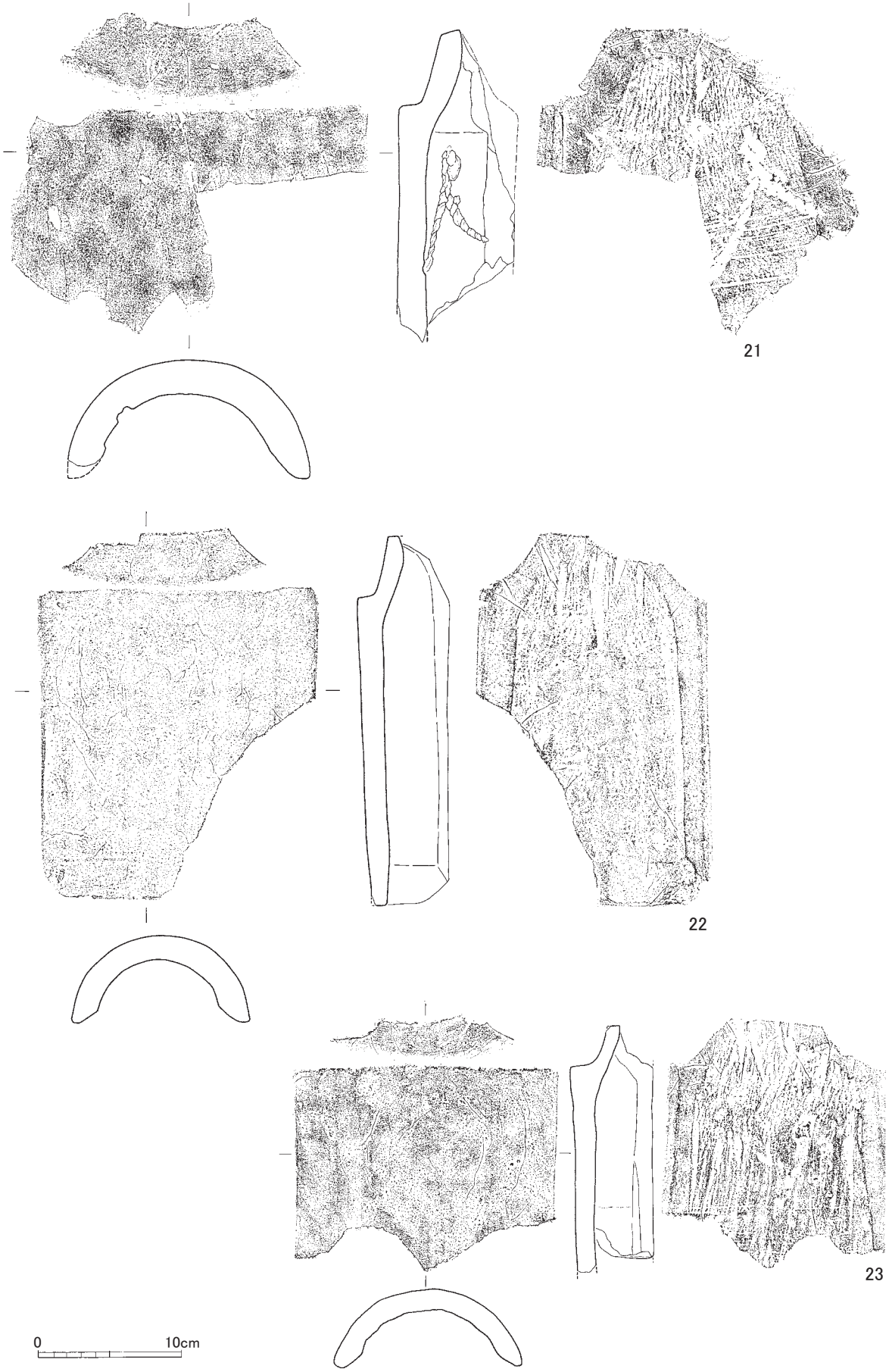
第18図61～63は城址公園内のクロマツ移植先掘削時の出土遺物である。61は染付磁器皿で、型紙摺絵により文様を施す。見込みには３箇所にハリ支えの痕跡が残る。62は染付磁器小碗で、高台内に九谷の銘款を持つ。63は磁器小杯で、見込に童子をあしらう。



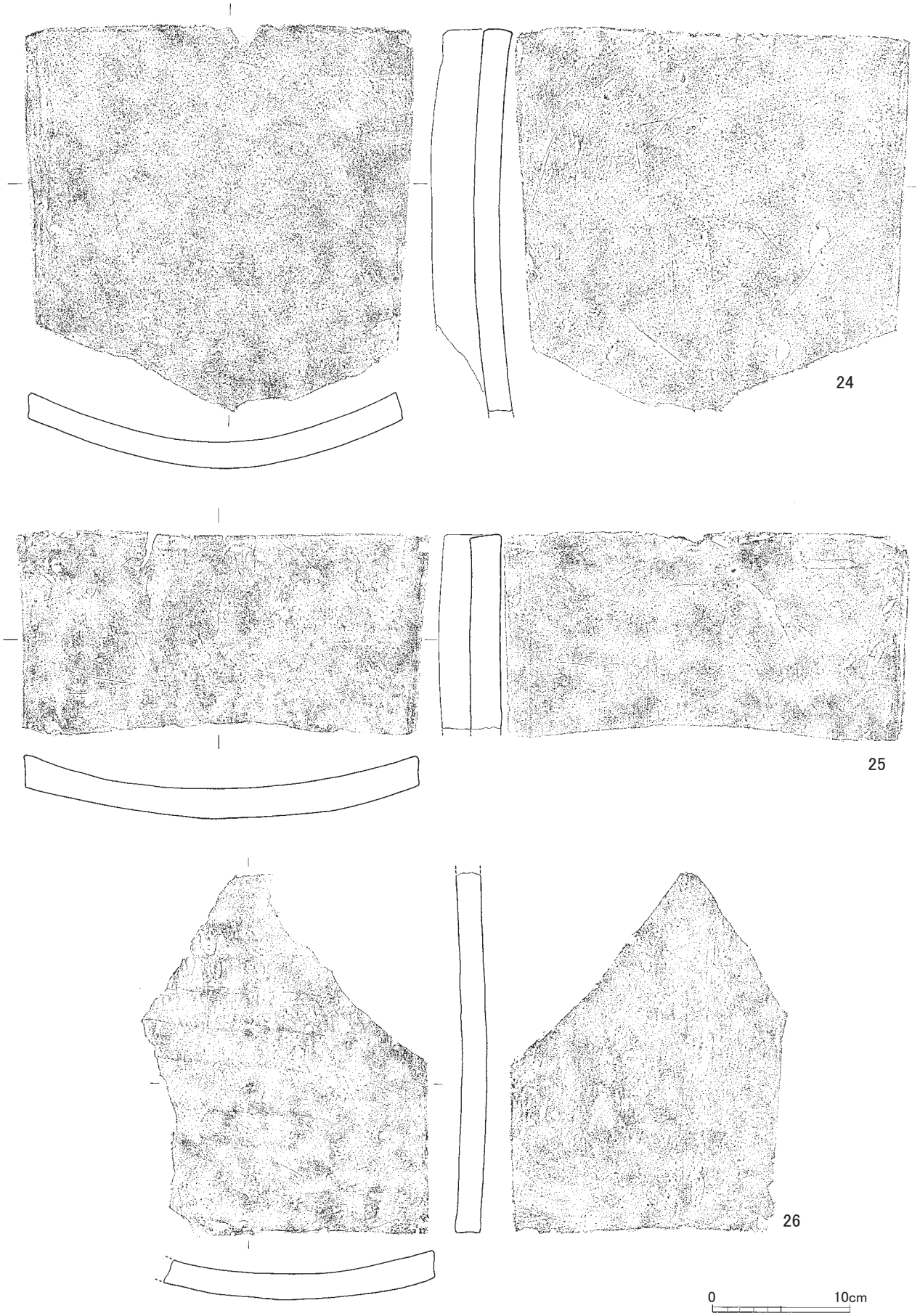
第7図　府内城・城下町第34－2次調査出土遺物実測図①（1/3）



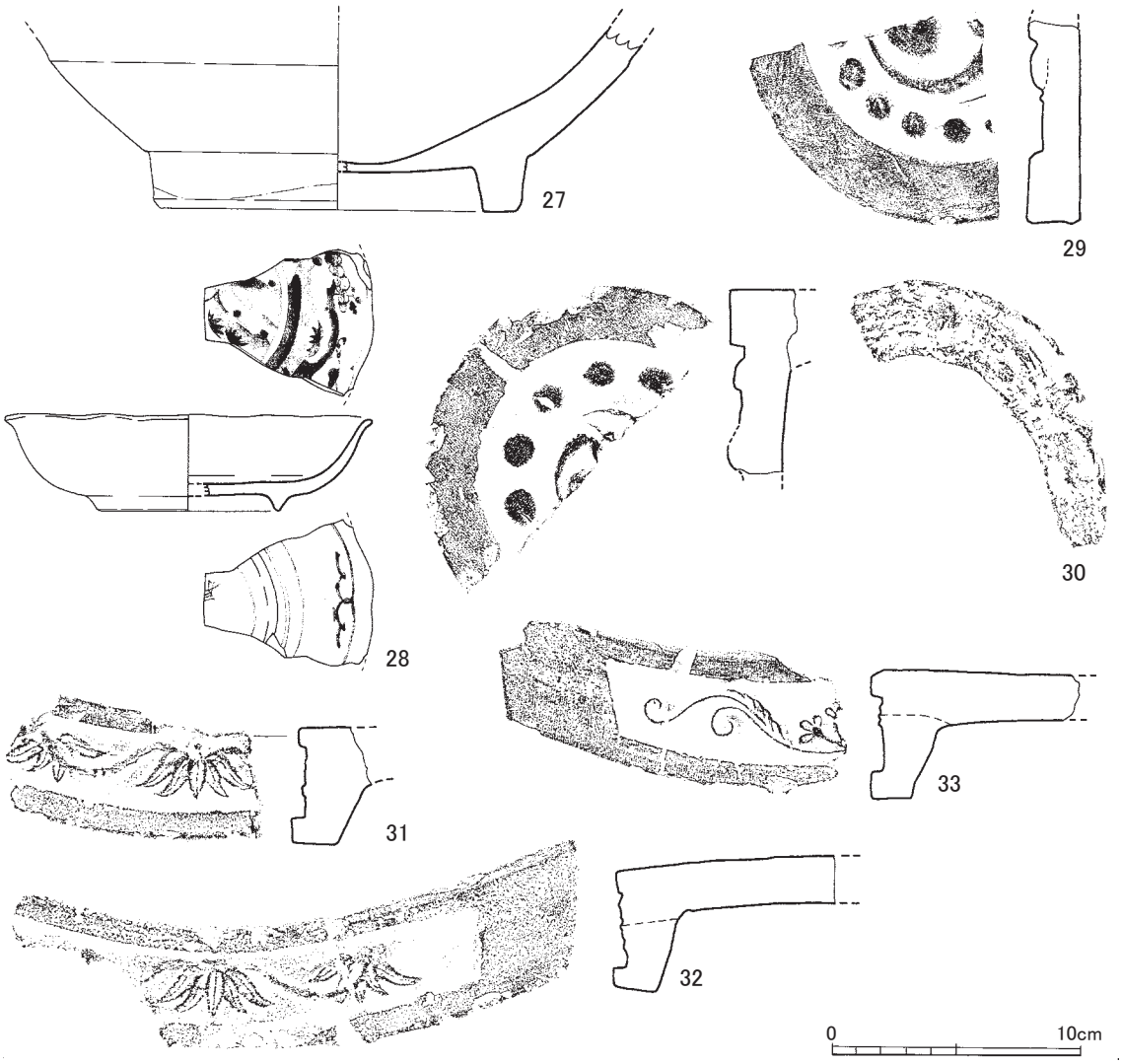
第8図　府内城・城下町第34－2次調査出土遺物実測図②（1/4）



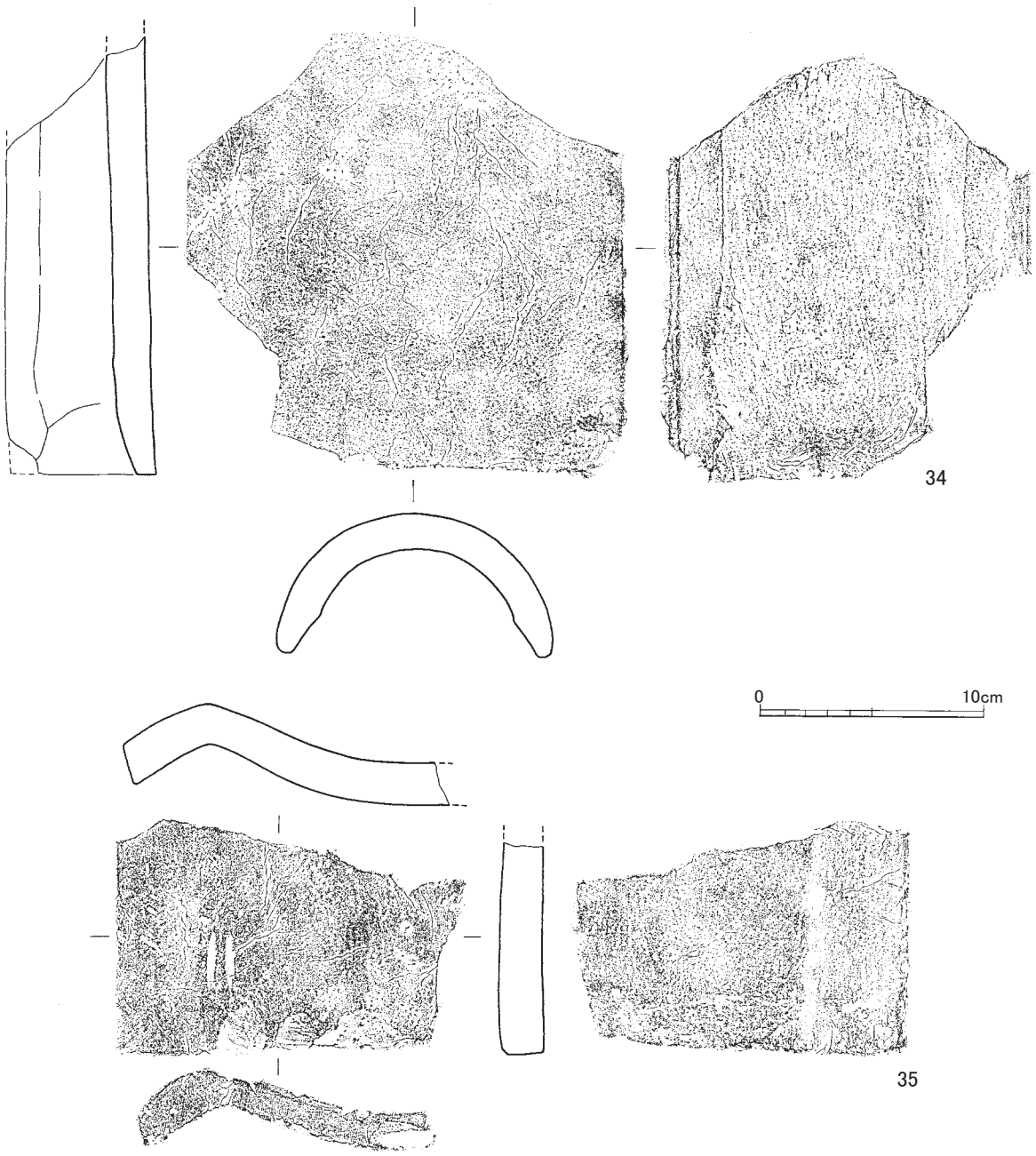
第9図　府内城・城下町第34－2次調査出土遺物実測図③（1/4）



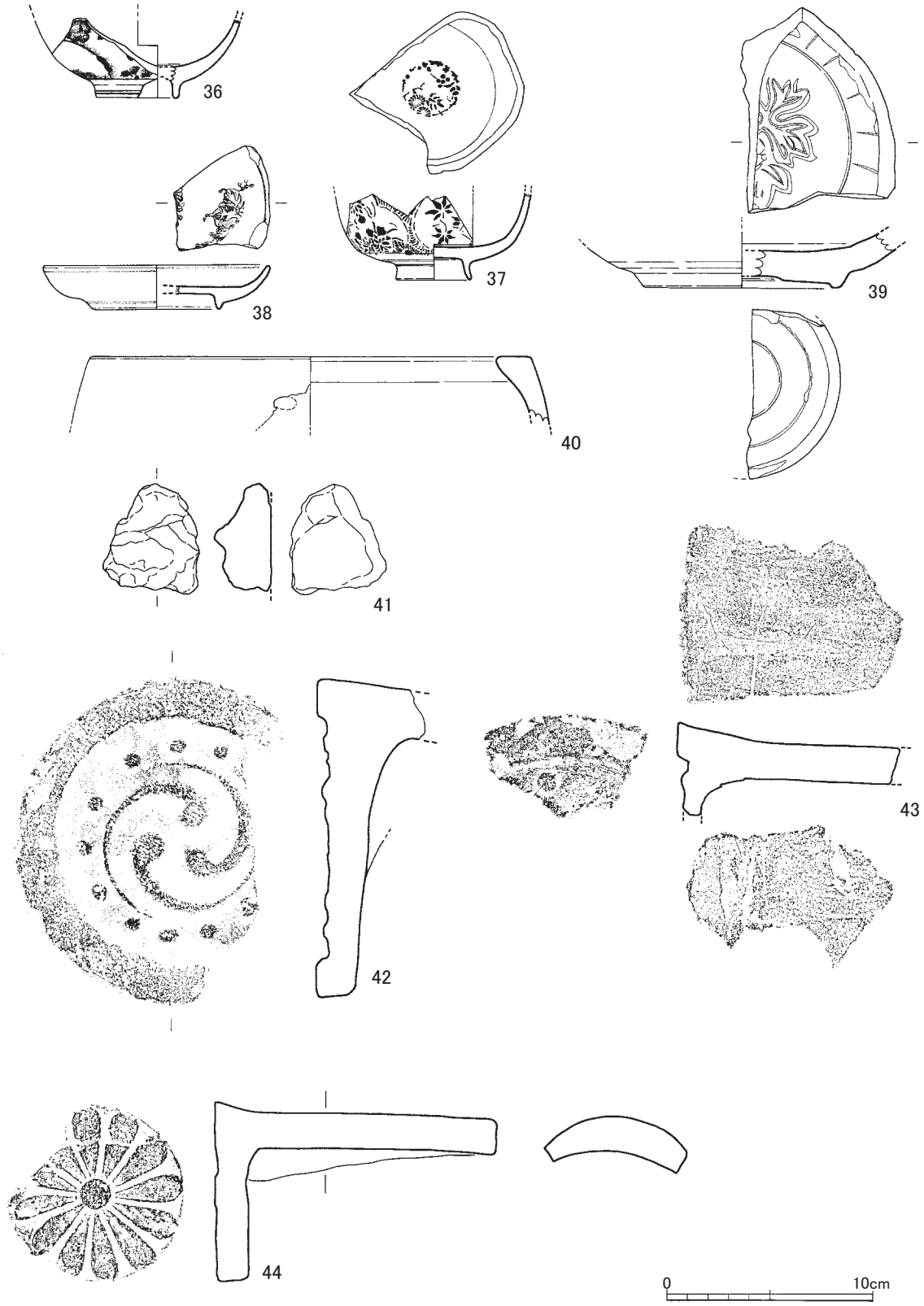
第10図　府内城・城下町第34－2次調査出土遺物実測図④（1/4）



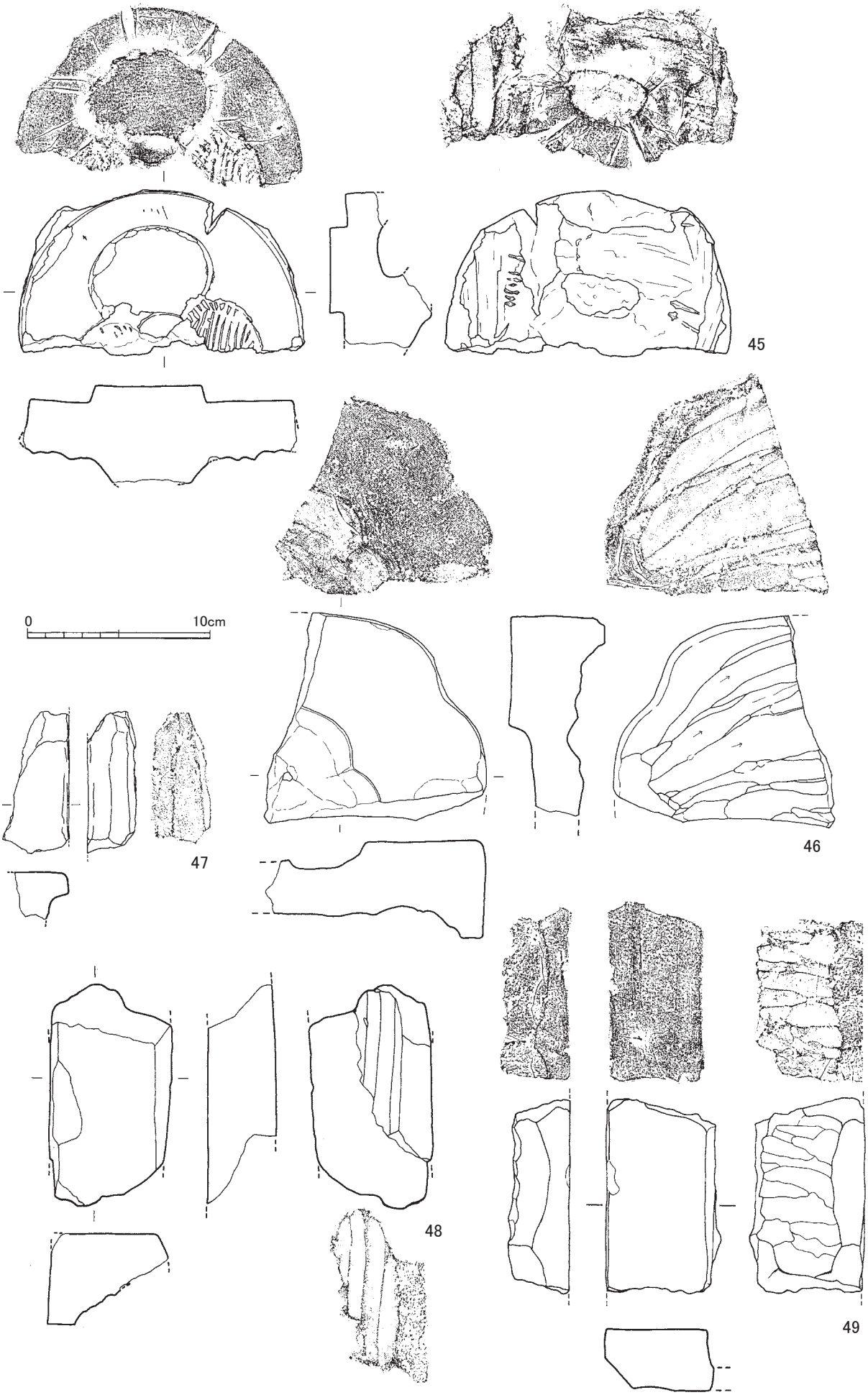
第11図　府内城・城下町第34－3次調査出土遺物実測図①（1/3）



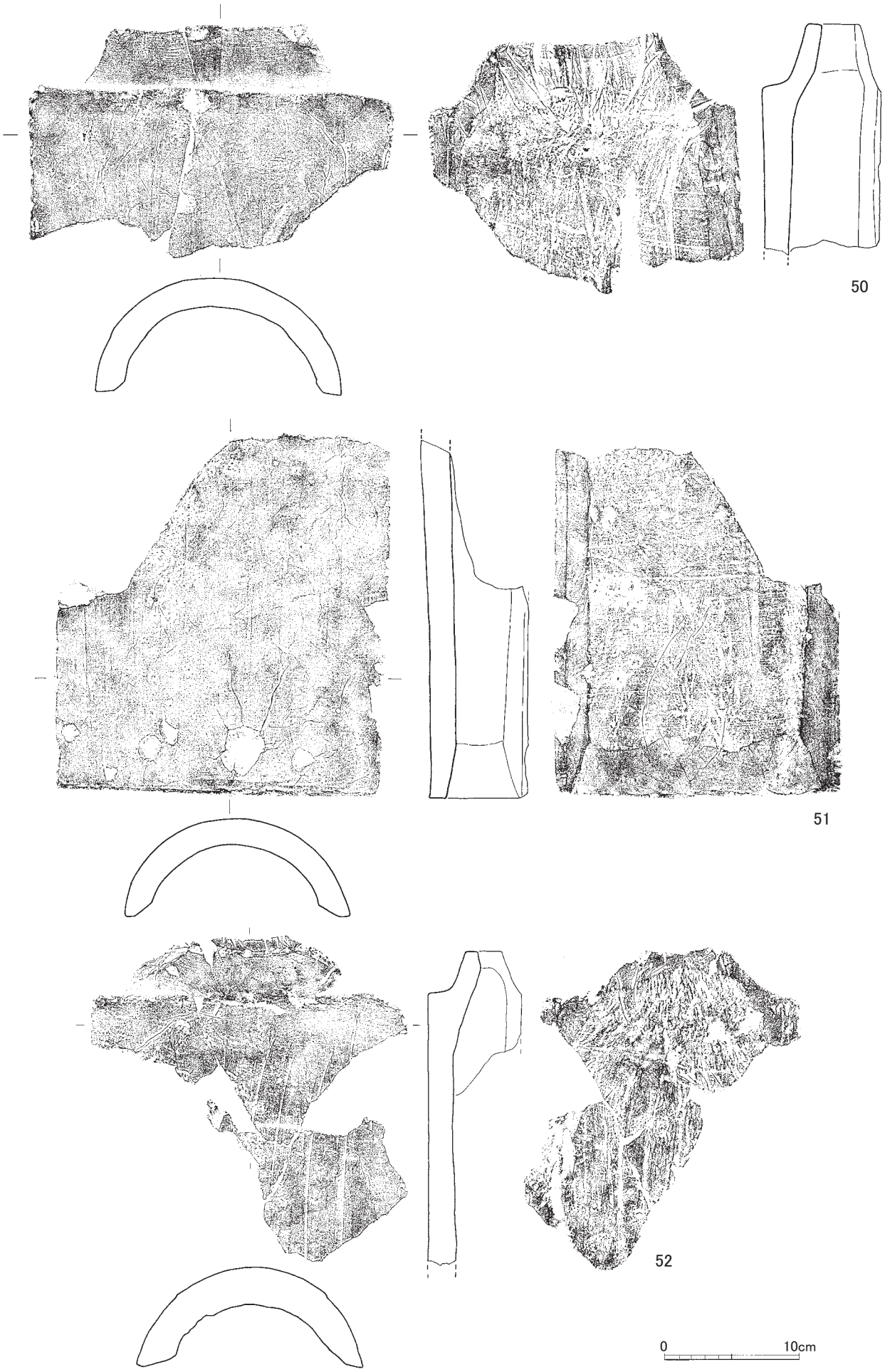
第12図　府内城・城下町第34－3次調査出土遺物実測図②（1/3）



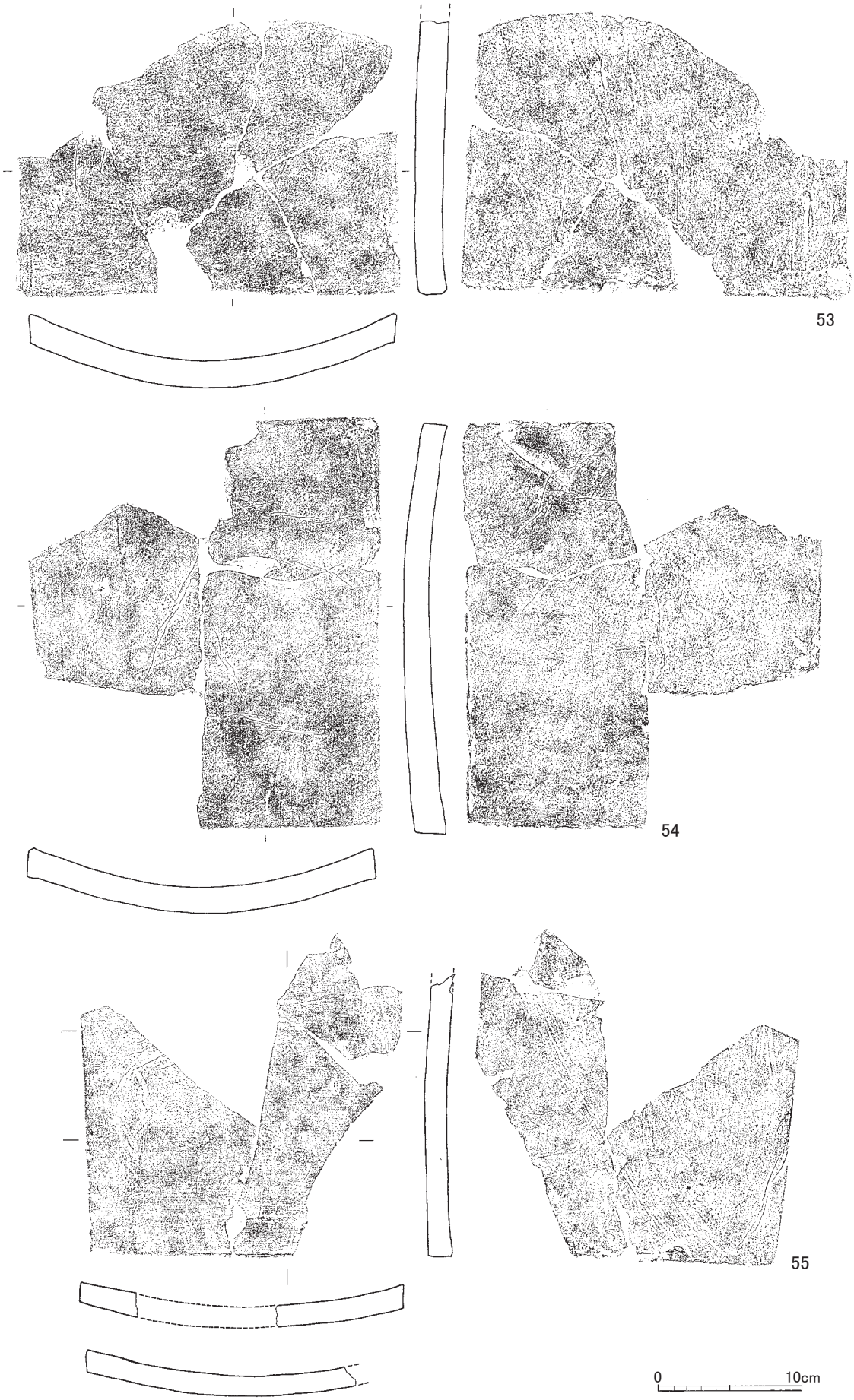
第13図　府内城・城下町第34－4次調査出土遺物実測図①（1/3）



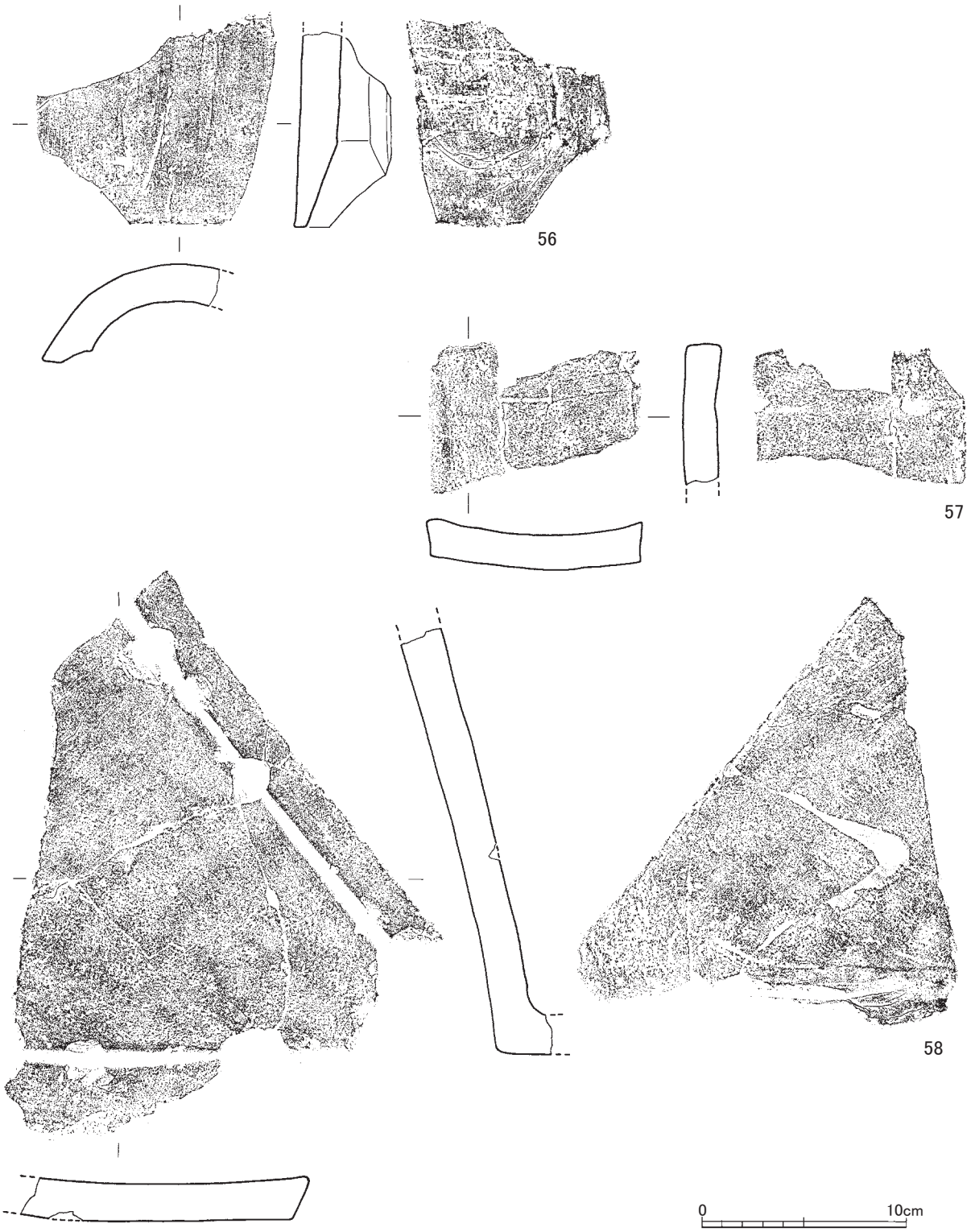
第14図　府内城・城下町第34－4次調査出土遺物実測図②（1/3）



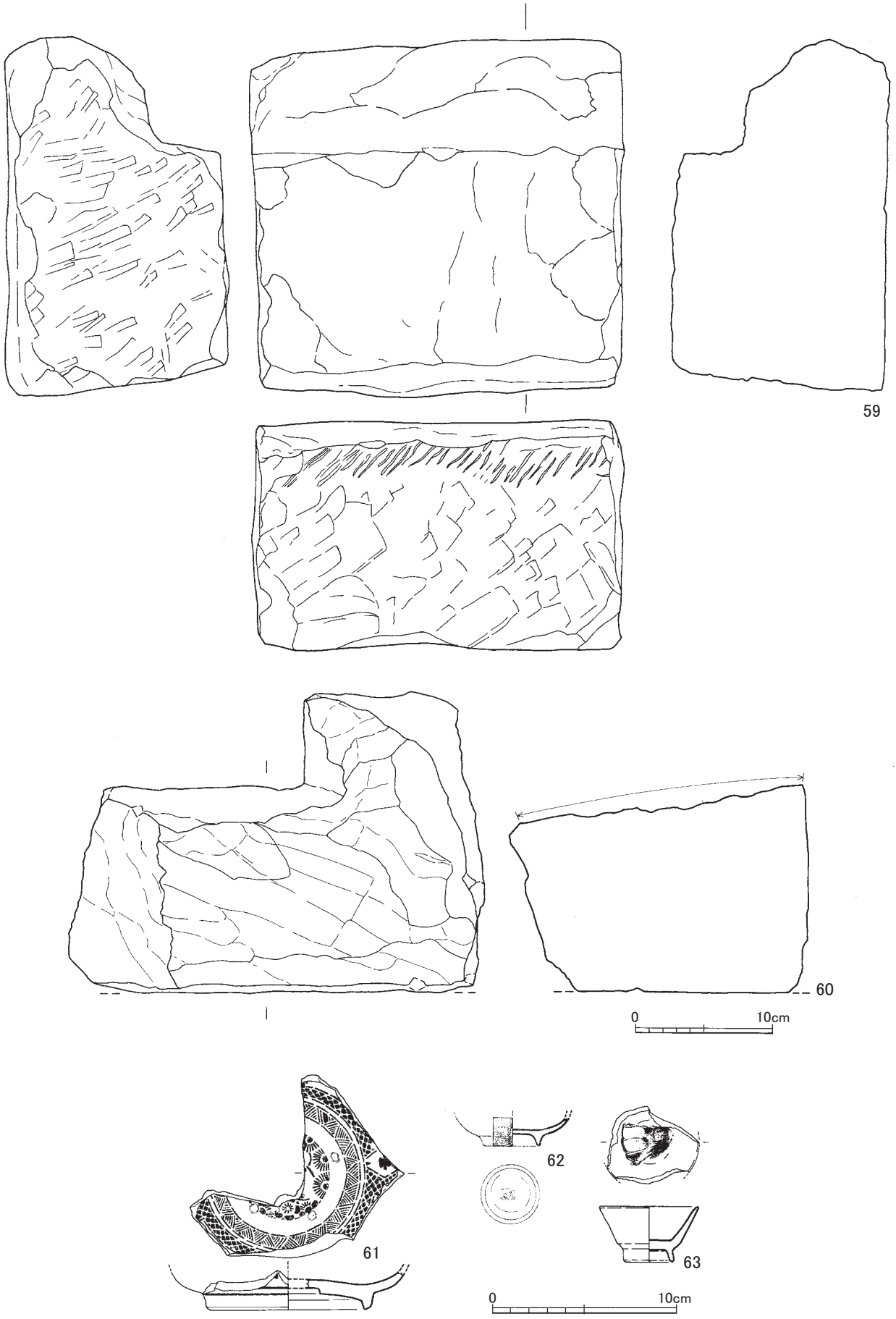
第15図　府内城・城下町第34－4次調査出土遺物実測図③（1/4）



第16図　府内城・城下町第34－4次調査出土遺物実測図④（1/4）



第17図　府内城・城下町第34－4次調査出土遺物実測図⑤（1/3）



第18図　府内城・城下町第34次調査出土遺物実測図（1/4・1/3）

第４章　国道197号道路改良事業（国道197号リボーン）に伴う立会調査

国道197号道路改良事業に伴う、府内城・城下町第34次調査以外の立会調査は、平成29年度から令和元年度にかけて、22地点で実施した（第19図）。また、クロマツの移植に伴い、令和３年度に２地点で実施した。調査箇所は合計24地点である。本章では実施した順にアルファベットの地点名を付して、第３表のとおり整理した。発掘調査はいずれも構造物の設置・撤去等で地中深く掘削する地点に限定したため、各地点とも調査面積は数㎡程度と狭小である。そのため、大部分は堆積層位の確認と遺物の回収にとどまり、明確な遺構を確認出来た地点はない。ただし、平成30年度に実施したT地点では、掘削中に陶磁器や瓦等の遺物が多量に出土しており、廃棄土坑等の遺構を掘削した可能性もある。ただし、全体が埋設管の攪乱を受けており、平面的なプランの確認はできなかった。また、U地点では国道側で一部礫層のような堆積を確認しており、廃棄土坑あるいは石垣裏込めの可能性も考えられたが、こちらも埋設管等の影響を受け平面的な確認は困難であった。

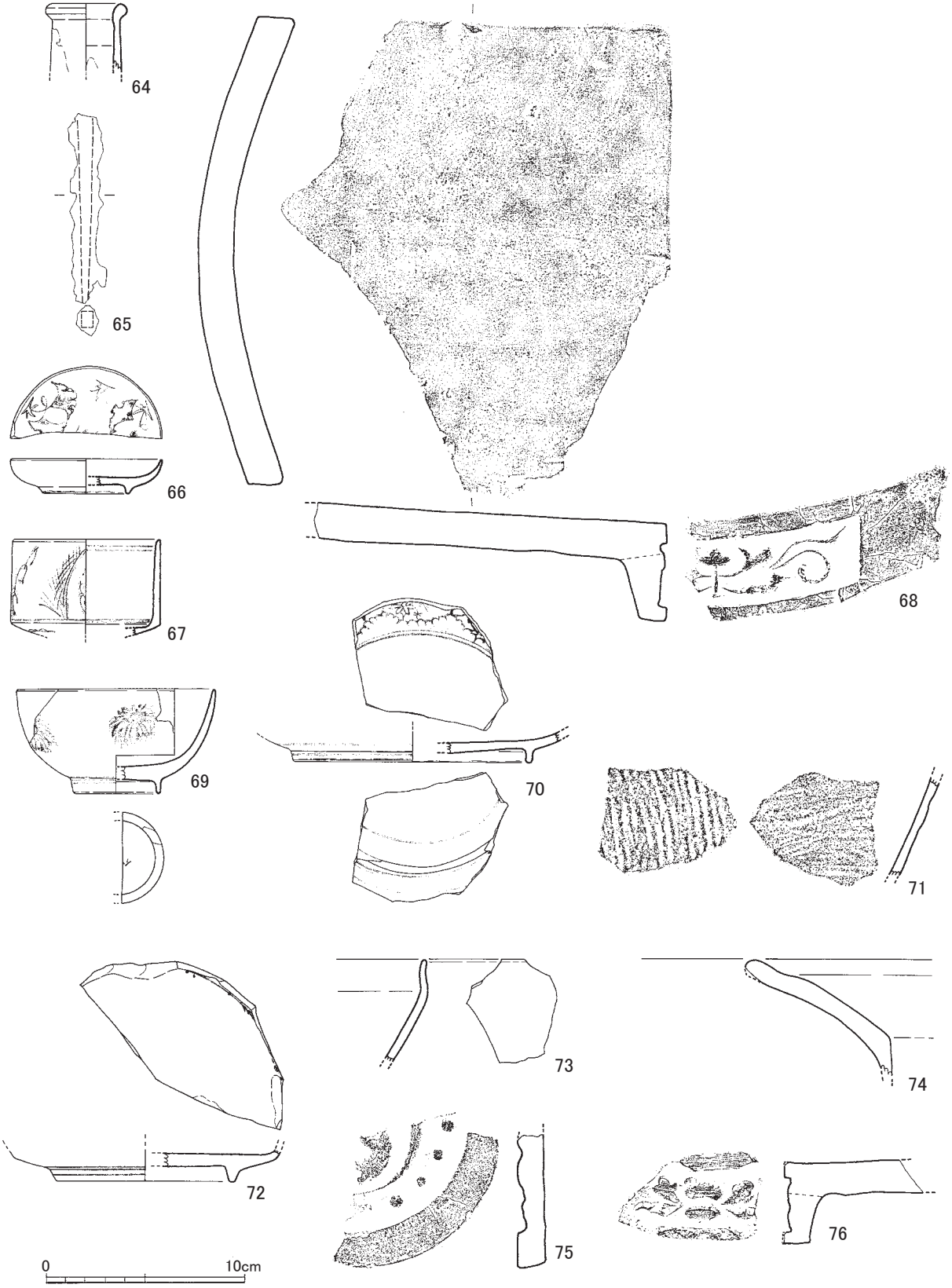
第19図　立会調査地点図（1/10000）

第3表　国道197号道路改良事業に伴う立会調査一覧

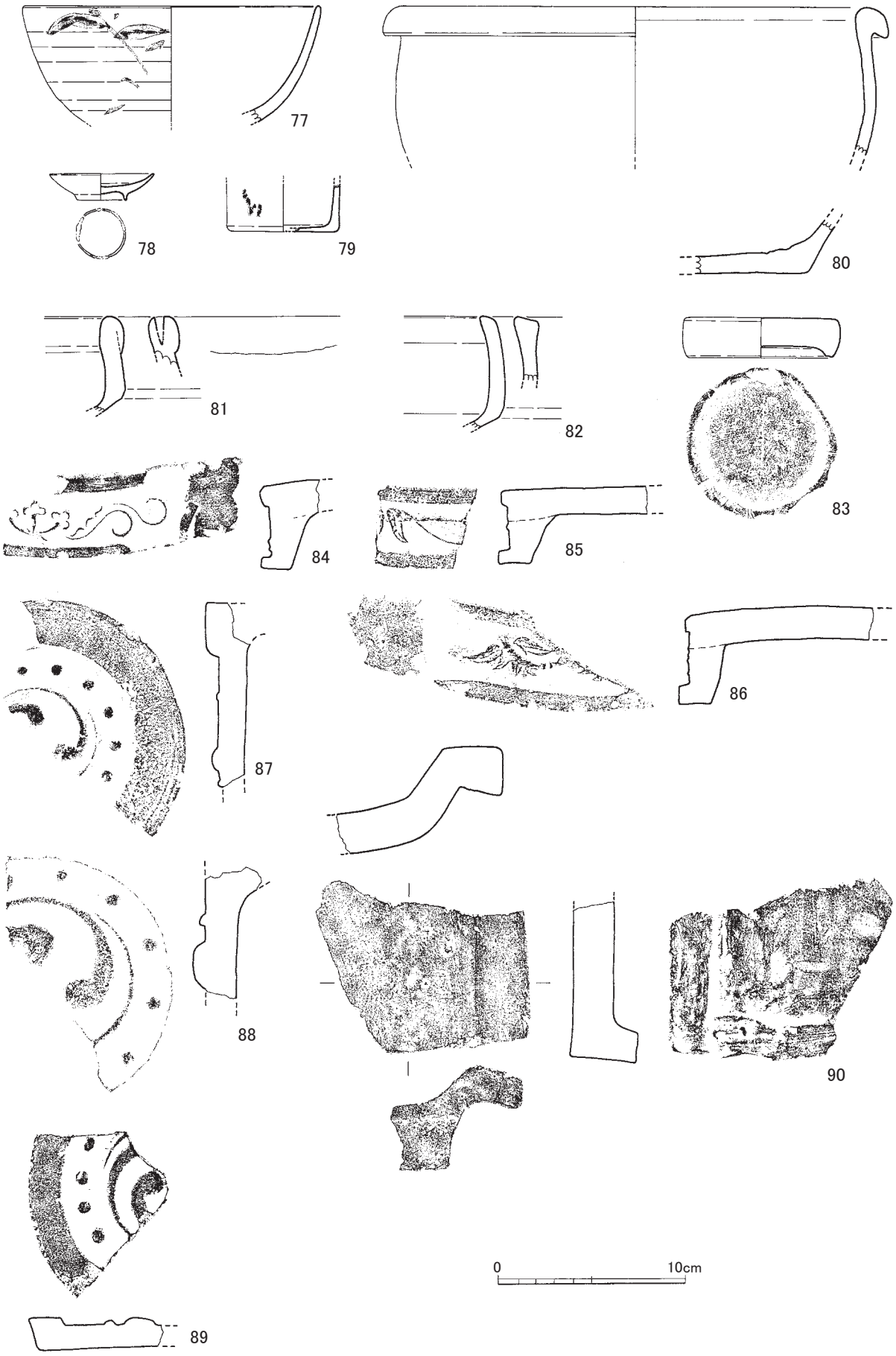
調査年度	地点	調査場所	調査日	担当	出土遺物	概要	備考
平成29年度	A地点	城址公園内（堀跡）	H29. 5.11	横澤	瓦、陶磁器	厚い堀の埋土を確認	移植先土壌調査
	B地点	城址公園前（公園側）	H29. 6. 1	横澤		掘削0.5m、掘削は盛土内	歩道橋基礎撤去
	C地点	城址公園前（県庁側）	H29. 6. 5	横澤		掘削0.5m、掘削は盛土内	歩道橋基礎撤去
	D地点	大分市役所前交差点	H29. 9.19	江田	瓦、陶磁器	約1.5mで地山砂層	歩道橋基礎撤去
	E地点	昭和通交差点北西角	H29.12. 1	横澤	陶磁器	掘削約1m、掘削は盛土内	H29改良第1地点
	F地点	昭和通交差点北東角	H29.12. 7	横澤	陶磁器、鉄釘	掘削約1m、掘削は盛土内	H29改良第2地点
	G地点	昭和通交差点南東角	H29.12. 7	横澤		掘削約1.6m、厚い盛土確認	H29改良第3地点
	H地点	中央町ビルディング前	H29.12.21	横澤	陶磁器	約1mで地山砂層	H29改良第4地点
	I地点	大手前交差点北西	H30. 2. 1	横澤		約1mで地山砂層	H29改良第5地点
	J地点	クロマツ前堀中	H30. 2.21	吉田		掘削0.15m	クロマツ支柱設置
	K地点	大分カトリック教会前	H30. 2.26	横澤	陶磁器	約1mで地山砂層	H29改良第6地点
	L地点	旧アリストンホテル前	H30. 3. 7	吉田		全体に攪乱	H29改良第7地点
平成30年度	M地点	太陽生命ビル前	H30. 4.17	土谷		掘削約1m、掘削は盛土土内	H29改良第8地点
	N地点	寿町１丁目交差点南東	H30. 4.23	土谷		掘削約1m、掘削は盛土土内	H29改良第9地点
	O地点	県庁前バス停西	H30.10.10	横澤	瓦、陶磁器、縄文土器	掘削約１m、地山まで至らず	H30改良第1地点
	P地点	大手前交差点北東側	H30.10.24	横澤		全体に攪乱	H30改良第2地点
	Q地点	NTT大分支店前	H30.11.22	横澤	瓦、陶磁器	約1mで地山砂層	H30改良第3地点
	R地点	大分市役所前	H30.12. 4	横澤		埋設管あり、約1.3mで地山砂層	H30改良第4地点
	S地点	大分中央郵便局前	H30.12.10	横澤		埋設管1、埋設ケーブル1	H30改良第5地点
	T地点	大分市役所西側	H30.12.18	横澤	瓦、土師器、陶磁器	遺物多量出土、廃棄土坑？	H30改良第6地点
	U地点	大手公園前	H31. 1.18	横澤	瓦、陶磁器、瓦質土器	国道側に一部礫層（石垣裏込？）	H30改良第7地点
令和元年度	V地点	県庁新館横駐車場前	R 1.11. 7	横澤	陶磁器	旧歩道橋基礎及び埋設管7本	R1改良第1地点
令和3年度	W地点	城址公園内（堀跡）	R 4. 1.17 R 4. 1.31	植田	陶磁器、瓦	掘削2.2m、盛土・堀埋土を確認	クロマツ移植先立会
	X地点	第34－4次調査地	R 4. 3.14	植田		復旧石垣への影響確認の立会	移植元へのマツ移植

出土遺物は第20～22図に示す。第19図64は施釉陶器の瓶で、口縁部は丸く肥厚し外反する。65は鉄釘で、身部は方形を呈する。66は染付磁器の皿で、見込にイチョウをあしらう。67は染付磁器筒形碗である。以上は平成29年度調査出土で、64・65はF地点、66はH地点、67はＫ地点から出土した。

68は軒平瓦で、瓦当部には橘文を中心とする均整唐草文を施す。吉田分類のF群に類似するが唐草の表現が異なり、該当する群がない。69は染付磁器丸碗で、外面の文様はコンニャク印判による。70は染付磁器皿

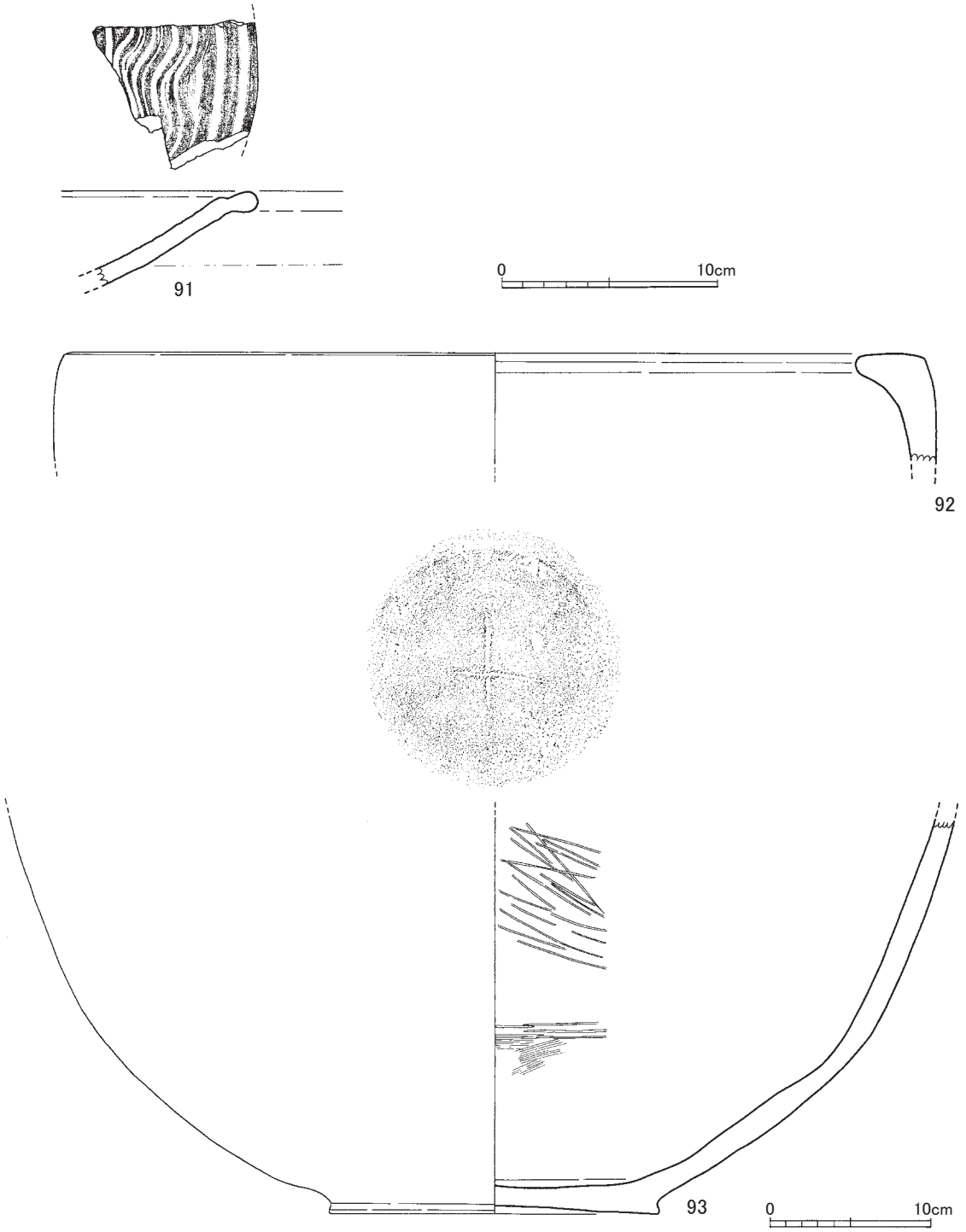


第20図　府内城・城下町立会調査出土遺物実測図①（1/3）



第21図　府内城・城下町立会調査出土遺物実測図②（1/3）

である。71は縄文土器深鉢の胴部下半片で、外面に縦位の貝殻条痕を施す。全体に摩滅しており、流れ込みによりもたらされたものであろう。72は磁器皿、73は施釉陶器の天目碗である。74は土師器の火消壺。75は軒丸瓦で、右巻き巴文の外側に珠文を配する。76は軒平瓦で、中心飾りから吉田分類G群に該当する。77は染付磁器碗、78は磁器のミニチュア皿としたが、碗蓋の可能性もある。ままごと道具であろうか。79は施釉陶器の瓶あるいは灰落しか。80は施釉陶器の鉢で、口縁部と底部は接合しないが同一個体とみられる。81・82は土師器焙烙で、81は口縁部の１箇所に孔を穿つ。83は土師器焼塩壺の蓋である。84は軒平瓦で、雄蕊状文の中心飾りに反転する唐草文を施す。吉田分類E群中段階に該当する。85・86は笹文を施す軒平瓦で、吉田分類A類に該当する。87～89は軒平瓦で、左巻き巴文の外側に珠文を配する。90は軒桟瓦である。91は施釉陶器の鉢で、唐津の製品。92・93は瓦質土器の甕で、93は見込みに「×」状の線刻を施す。以上は平成30年度調査出土分で、68～71はO地点、72～76はQ地点、77～90はT地点、91～93はU地点から出土した。



第22図　府内城・城下町立会調査出土遺物実測図（1/3・1/4）

第4表　府内城・城下町（第34次調査）出土土器・陶磁器観察表

（　）は復元又は現存値を示す

挿図番号		器種		出土地点	法量（cm）		器面調整		色調（外面／内面）	備考
					直径	器高	外面	内面		
第6図	1	施釉陶器	碗	第34-1次調査	底径（3.0）	（1.7）	施釉・露胎	施釉	灰白色／灰白色	関西系陶器
	2	染付磁器	端反碗	第34-1次調査		（3.3）	施釉・染付	施釉	明青灰色／明青灰色	瀬戸美濃
	3	染付磁器	端反碗	第34-1次調査	口径（8.5） 底径（2.9）	4.1	施釉・染付（隷字体文）	施釉	白色／白色	瀬戸美濃 19世紀
第7図	8	染付磁器	瓶	第34-2次調査 西区		（7.3）	施釉・染付	露胎		
	9	染付磁器	端反碗	第34-2次調査 東区	口径（8.4） 底径 3.0	4.1	施釉・染付（隷字体文）、口縁に鉄漿	施釉		瀬戸美濃 19世紀
	10	染付磁器	碗	第34-2次調査 西区	底径 4.0	（1.7）	施釉・染付（雪輪文）	施釉・染付		肥前 18世紀後葉
第11図	27	施釉陶器	鉢	第34-3次調査	底径（14.2）	（7.3）	施釉・露胎	施釉・露胎		
	28	染付磁器	皿	第34-3次調査	口径（14.5） 底径 7.0	3.8	施釉・染付	施釉・染付		肥前
第13図	36	染付磁器	碗	第34-4次調査 石垣2段目	底径（4.0）	（3.7）	施釉・染付（梅樹文）	施釉	灰白色／灰白色	肥前 18世紀
	37	染付磁器	碗	第34-4次調査 石垣2段目	底径 3.5	（4.2）	施釉・染付（型紙摺）	施釉・染付（型紙摺）	灰白色／灰白色	肥前 明治初年
	38	染付磁器	皿	第34-4次調査 石垣1段目	口径（10.9）	2.1	施釉・染付	施釉・染付	白色／白色	近代
	39	青磁	盤	第34-4次調査 石垣3段目	底径（9.6）	（2.7）	施釉・鉄錆・露胎	施釉・印花文	青緑色／青緑色	肥前、高台内重ね焼き痕あり
	40	瓦質土器	風炉	第34-4次調査 石垣2段目	口径（21.1）	（3.3）	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色／灰色	
第18図	61	染付磁器	皿	第34-4次調査 移植先立会	底径 8.3	（2.1）	施釉・染付（型紙摺）	施釉・染付（型紙摺）	白色／白色	肥前 明治初年
	62	染付磁器	小碗	第34-4次調査 移植先立会	底径（3.0）	（1.5）	施釉	施釉	朱色／灰白色	高台内「九谷」銘
	63	染付磁器	小杯	第34-4次調査 移植先立会	口径（5.3） 底径（2.5）	3.0	施釉	施釉・染付（童子）	白色／白色	近代か
第20図	64	施釉陶器	瓶	H29立会F地点	口径（3.5）	（2.3）	施釉・露胎	施釉・露胎	暗茶色・黒茶色／暗茶色・黒茶色	
	66	染付磁器	皿	H29立会H地点	口径（7.5） 底径（4.4）	1.7	施釉	施釉・染付（銀杏文）	白色／白色	肥前
	67	染付磁器	筒形碗	H29立会K地点	口径（7.4）	（4.7）	施釉・染付	施釉・染付	灰白色／灰白色	肥前 18世紀
	69	染付磁器	碗	H30立会O地点	口径（9.8） 底径 4.2	5.2	施釉・染付（コンニャク印判）	施釉	白色／白色	肥前 18世紀
	70	染付磁器	皿	H30立会O地点	底径（11.8）	（1.6）	施釉・染付	施釉・染付	白色／白色	肥前
	71	縄文土器	深鉢	H30立会O地点		（4.8）	条痕	条痕	にぶい橙色／にぶい橙色	
	72	染付磁器	皿	H30立会Q地点	底径 9.0	（1.6）	施釉・染付	施釉・染付	白色／白色	肥前
	73	施釉陶器	天目碗	H30立会Q地点		（5.2）	施釉	施釉		
	74	土師器	火消壺	H30立会Q地点		（7.3）	ナデ	ヨコナデ	橙色／橙色	
第21図	77	染付磁器	碗	H30立会T地点	口径（15.5）	（6.1）	施釉・染付	施釉	灰白色／灰白色	肥前
	78	磁器	ミニチュア皿	H30立会T地点	口径 5.5 底径 2.5	1.4	施釉	施釉	灰白色／灰白色	蓋の可能性あり ままごと道具
	79	施釉陶器	灰落し	H30立会T地点	底径（5.7）	（2.5）	施釉	施釉	明褐灰色／灰白色	関西系陶器
	80	施釉陶器	鉢	H30立会T地点	口径（24.3）	（7.7）	施釉・露胎	施釉	オリーブ灰色／オリーブ灰色	
	81	土師器	炮烙	H30立会T地点		（4.0）	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ	橙色／橙色	口縁頂部に穿孔
	82	土師器	炮烙	H30立会T地点		（5.1）	ヨコナデ・ケズリ・未調整	ヨコナデ	にぶい褐色／にぶい橙色	
	83	土師器	焼塩壺蓋	H30立会T地点	口径 7.4 底径 7.8	2.1	ヨコナデ・ナデ	布目痕	にぶい黄橙色／にぶい黄橙色	
第22図	91	施釉陶器	鉢	H30立会U地点		（4.3）	施釉・露胎	施釉・刷毛目文		肥前（唐津）
	92	瓦質土器	甕	H30立会U地点	口径（53.0）	（6.7）	ヨコナデ	ヨコナデ	黒灰色／黒灰色	
	93	瓦質土器	甕	H30立会U地点	底径 20.2	（24.3）	ヨコナデ	ヨコナデ・ハケ目	黒灰色／黒灰色	見込みに「×」の線刻

第5表　府内城・城下町第34次調査出土瓦観察表①

（　）は復元又は現存値を示す

挿図番号		器種	出土地点	法量（cm）			重量（g）	素材	備考
				長さ	幅	厚さ			
第6図	4	軒平瓦	第34-1次調査	(5.8)	4.5	1.8		土	唐草文 吉田R群
	5	軒平瓦	第34-1次調査	(11.3)	3.2	1.4		土	唐草文
	6	桟瓦	第34-1次調査	(14.5)	(11.2)	1.7		土	
	7	鯱瓦	第34-1次調査	(6.1)	(6.5)	1.8		土	鱗文
第7図	11	軒丸瓦	第34-2次調査 西区	14.3		2.1		土	左巻き巴文＋珠文（12）
	12	軒丸瓦	第34-2次調査 西区	(5.8)				土	左巻き巴文＋珠文
	13	軒丸瓦	第34-2次調査 西区	(17.0)				土	左巻き巴文＋珠文
	14	軒丸瓦	第34-2次調査 東区	(9.5)		1.8		土	左巻き巴文＋珠文
	15	軒丸瓦	第34-2次調査 東区	(7.3)		2.3		土	左巻き巴文＋珠文
	16	軒丸瓦	第34-2次調査 西区	(5.6)	(11.0)	1.6		土	左巻き巴文＋珠文
	17	軒平瓦	第34-2次調査 西区	(14.0)	4.7	1.7		土	吉田D-2群
	18	軒平瓦	第34-2次調査 西区	(4.9)	(11.8)	1.5		土	蔓草？＋唐草文 吉田M群か
第8図	19	丸瓦	第34-2次調査 西区	32.5	16.6	2.2		土	
	20	丸瓦	第34-2次調査 西区	31.9	16.5	1.2		土	
第9図	21	丸瓦	第34-2次調査 西区	(21.5)	16.9	2.4		土	
	22	丸瓦	第34-2次調査 西区	25.5	12.3	1.5		土	
	23	丸瓦	第34-2次調査 西区	(17.0)	13.0	1.5		土	コビキB
第10図	24	平瓦	第34-2次調査 西区	(27.5)	28.3	1.9		土	
	25	平瓦	第34-2次調査 西区	(13.6)	28.6	2.2		土	
	26	平瓦	第34-2次調査 西区	(25.9)	(18.7)	1.8		土	
第11図	29	軒丸瓦	第34-3次調査	(7.9)	(10.0)			土	右巻き巴文＋珠文
	30	軒丸瓦	第34-3次調査	(7.2)	(11.0)			土	左巻き巴文＋珠文
	31	軒平瓦	第34-3次調査	(9.9)	4.5			土	笹状文 吉田A群
	32	軒平瓦	第34-3次調査	(22.0)	4.6	1.9		土	笹状文 吉田A群
	33	軒平瓦	第34-3次調査	(13.6)	5.0	1.8		土	雄蕊状文＋唐草文 吉田E群古段階
第12図	34	丸瓦	第34-3次調査	(19.3)	12.2	1.6		土	
	35	桟瓦	第34-3次調査	(9.3)	(14.6)	1.9		土	
第13図	42	軒丸瓦	第34-4次調査 石垣1段目	(6.5)	15.5			土	左巻き巴文＋珠文
	43	軒丸瓦	第34-4次調査 石垣2段目	(10.7)		1.8		土	珠文
	44	小菊瓦	第34-2次調査 西区 第34-4次調査	13.6	8.5	1.6		土	
第14図	45	鬼瓦	第34-4次調査 石垣3段目	(9.1)	(15.7)	(5.6)		土	
	46	鬼瓦	第34-4次調査 石垣3段目	(11.3)	(12.0)	2.8		土	袖部、背面ケズリ
	47	鬼瓦	第34-4次調査 石垣2段目	(7.2)	(3.6)	2.6		土	袖部、背面ケズリ
	48	鬼瓦	第34-4次調査 石垣1段目	(12.0)	(6.6)	3.8		土	袖部、背面ケズリ
	49	鬼瓦	第34-4次調査	(10.2)	(6.3)	3.1		土	袖部、背面ケズリ

第5表　府内城・城下町第34次調査出土瓦観察表②

（　）は復元又は現存値を示す

挿図番号		器種	出土地点	法量（cm）			重量（g）	素材	備考
				長さ	幅	厚さ			
第15図	50	丸瓦	第34-4次調査 移植時	（18.5）	18.0	2.1		土	
	51	丸瓦	第34-4次調査 移植時	（16.8）	16.5	1.9		土	
	52	丸瓦	第34-4次調査	（23.5）	16.6	2.5		土	
第16図	53	平瓦	第34-4次調査 移植時	（15.2）	25.4	2.0		土	
	54	平瓦	第34-4次調査	28.0	24.0	1.8		土	
	55	平瓦	第34-4次調査	（22.4）	22.0	1.5		土	
第17図	56	丸瓦	第34-4次調査 石垣1段目	（9.4）	（9.6）	1.8		土	
	57	熨斗瓦	第34-4次調査 石垣2段目	6.8	10.5	1.6		土	
	58	切隅瓦	第34-4次調査 石垣1段目	（20.5）	（13.0）	1.8		土	
第20図	68	軒平瓦	H30立会O地点	12.5	4.8	1.8		土	橘文＋均整唐草文 吉田F群に類似
	75	軒丸瓦	H30立会Q地点	（6.6）	（7.0）	1.3		土	右巻き巴文＋珠文
	76	軒平瓦	H30立会Q地点	（3.9）	（6.8）	1.6		土	吉田G群
第21図	84	軒平瓦	H30立会T地点	（12.2）	（4.3）	1.7		土	雄蕊状文＋唐草文 吉田E群中段階
	85	軒平瓦	H30立会T地点	（5.1）	3.8	1.4		土	笹状文 吉田A群
	86	軒平瓦	H30立会T地点	（16.5）	4.4	1.7		土	笹状文 吉田A群
	87	軒丸瓦	H30立会T地点	（14.6）				土	
	88	軒丸瓦	H30立会T地点	（13.4）				土	左巻き巴文＋珠文
	89	軒丸瓦	H30立会T地点	（8.2）	（9.3）	2.2		土	左巻き巴文＋珠文
	90	軒桟瓦	H30立会T地点	（8.2）	（9.3）	2.2		土	

第6表　府内城・城下町第34次調査出土土製品観察表

（　）は復元又は現存値を示す

挿図番号		器種		法量（cm）			重量（g）	素材	備考
				長さ	幅	厚さ			
第13図	41	壁土	第34-4次調査 石垣2段目	（5.3）	（4.7）	（2.8）		土	スサ混入

第7表　府内城・城下町第34次調査出土石製品観察表

（　）は復元又は現存値を示す

挿図番号		器種		法量（cm）			重量（g）	素材	備考
				長さ	幅	厚さ			
第18図	59	加工石材	第34-4次調査 石垣2段目	27.2	25.0	16.7	14500.0	凝灰岩	側面にノミ痕
	60	加工石材	第34-4次調査 石垣裏込	（36.4）	（21.7）	（14.8）	12500.0	凝灰岩	側面にノミ痕

第8表　府内城・城下町第34次調査出土金属製品観察表

（　）は復元又は現存値を示す

挿図番号		器種		法量（cm）			重量（g）	素材	備考
				長さ	幅	厚さ			
第20図	65	鉄釘	H29立会F地点	（9.3）	0.6	0.8	23.2	鉄	

第５章　総括

最後に、府内城・城下町第34次調査の成果をまとめて総括としたい。

府内城・城下町第34次調査は、国道197号の舗道改修を目的とした道路改良事業の一環として、府内城の西ノ丸と三ノ丸を隔てる内堀端にあるクロマツ古木の移植に際して実施したものである。発掘調査は移植作業の工程に応じて４度に分けて実施し、第34－2次調査では、クロマツの根元でほぼ東西方向に続く石列を１条検出した。石列の高さは１段で、北側の内堀に対して面を揃えており、また上端の高さが揃った、横目地の通ったものである。一部には間詰石状の小礫が見られることから、ある段階における石垣の痕跡である可能性が考えられた。ただし、その構築時期については明らかにできなかった。

第34－4次調査は、クロマツ本体の移植に伴い、大分県指定史跡を構成する三ノ丸北端の石垣の一部を一時解体することになり、それに伴い実施したものである。発掘調査では石垣の上部３段、幅12.6m、高さ最大で1.4mの範囲で石垣の解体・発掘調査を実施した。その結果、石垣の最上部裏込から近世の遺物とともに近現代の什器類が出土しており、国道の建設に際して石垣が積み直された可能性が考えられた。また、２段目～３段目上位からは幕末～近代の陶磁器が出土し、やはり近代以降の改修の痕跡が認められた。また、裏込め層からは多量の瓦が出土しており、不要な瓦礫を裏込めに転用した可能性が考えられた。石垣３段目下部から下は部分的な掘り下げに留まるが、近世の遺物しか出土していないことから、これより下部は近世段階の石垣が残存している可能性が考えられた。しかし、築石には乱れが生じていることから、築城当初の姿を保つものではなく、近世のある段階で改修を受けているものとみられる。

石垣については、築石には主に安山岩や角閃安山岩を用い、間詰石には溶結凝灰岩や安山岩、河川転礫が用いられていた。角閃安山岩は府内城の北西、高崎山一帯で産出することが知られ、別府では赤みがかった角閃安山岩は別府石と称される。府内城の築石もおそらくはこの高崎山一帯で採取されたものであろう。現存する石垣には矢穴の痕跡を持つ築石もみられることから、転礫の他に割石を用いていることがわかる。府内城は福原直高によって築城が開始され、主要な施設が完成したのは竹中重利の代であるという。三ノ丸内堀側の石垣も、おそらくは17世紀前半には構築され、その後、築石を再利用しながら適宜積み直しが行われたのであろう。

最後に、石垣の解体と復元についてである。石垣の解体の結果明らかになったことは、特に近代以降の改修は極めて雑に行われており、間詰に円礫が使用されたり、裏込め石の充填が十分になされていないなど、石材同士の噛み合わせが弱く、石垣の強度としては極めて弱い状態にあるこという点である。これはとりもなおさず、将来的な石垣の崩壊の危険性を孕むものであり、石垣の維持管理には注意が必要といえる。石垣の孕み具合や、間詰石の脱落等、石垣の状態をこまめに観察し、異常を早期に把握するようなことが必要になってこよう。

調査で一時解体した箇所については、事前に作成した記録をもとに築石を忠実に積み直し、裏込めには新材の割石を充填し強度を確保する方針をとった。また、水流により土砂が流出して石垣の目詰まりを起こし、その圧力で石垣が崩壊することを防ぐため、裏込めと地山の境に不織布にマットによる吸出し防止材を設置した。石垣の史跡としての価値を保全しつつ、強度を持たせた復元を行うこうした手法は、今後も引き継がれるべきものである。

発掘調査が極めて限定的な範囲で実施されたものであることから、得られた情報はかならずしも多くはないが、それでも現存する石垣の解体を伴う調査はこれが初めてであり、今後の府内城跡の保存・活用に資する情報が得られたのではないかと考える。また、石垣の解体～発掘調査～復元に至る一連のプロセスは、今後のモデルともなるものである。折しも、府内城跡については整備活用に向けた動きが始まっており、今回の調査成果が今後の府内城跡の保存・活用に役立てられることを願って、本書のまとめとしたい。

添付ＤＶＤについて

1　巻末添付の DVD には、府内城・城下町第 34 次調査の石垣三次元測量、写真測量データ及び、発掘調査の概要をまとめた動画データを収録しています。

2　三次元測量のビューアは、「03 プログラムデータ」フォルダにある「GeoView 取扱説明書.pdf」に従い、「GeoView32.exe」又は「GeoView64.exe」を使用して下さい。

3　動画データは動画投稿サイト「YouTube」上の「大分県立埋蔵文化財センターVR」チャンネル（チャンネル URL https://www.youtube.com/@user-py1ht4zk7h）に登録・公開しているデータを収録しています。

4　収録した各データの著作権は大分県教育委員会に帰属します。刊行物その他で所収データを使用する場合は、大分県立埋蔵文化財センターに申請しその許可を得た上で使用して下さい。

5　フォルダおよびデータ構成は以下のとおりです。

- 石垣解体前三次元測量データ
  - 01 点群データ
    - 編集データ.txt
  - 02View データ
    - 編集データ.RND
  - 03 プログラムデータ
    - GeoView32.exe
    - GeoView64.exe
    - GeoView 取扱説明書.pdf
- 石垣解体面オルソフォト
  - 石垣 1 段目上面オルソフォト.pdf
  - 石垣 2・3 段目上面オルソフォトデータ.pdf
  - 石垣 4 段目上面オルソフォトデータ.pdf
- 動画データ（大分県指定史跡府内城跡における石垣解体復元の解説）.mp4

写　真　図　版

第34－1次調査（西から）

第34－1次調査石列検出状況

第34－2次調査東区

第34－2次調査東区石列

第34－2次調査西区

第34－2次調査西区石列

第34－3次調査北区栗石検出状況

第34－3次調査南区掘削状況

第34－4次調査　石垣解体前

石垣解体前（北東から）

石垣番号付け作業

石垣番号付け状況

石垣番号付け状況（部分）

石垣天端石検出状況

石垣天端石検出状況（東から）

石垣天端石検出（南から）

写真測量標定点観測作業

天端石写真測量

築石1段目解体状況

石垣解体作業

1段目裏込め発掘状況

1段目軒丸瓦出土状況

1段目加工石材出土状況

築石2段目解体状況

築石2段目解体状況（西から）

2段目鬼瓦出土状況

築石2段目解体状況（東から）

2段目磁器碗出土状況

築石3段目解体状況及び土層断面（東から）

築石3段目解体状況及び土層断面（西から）

高瀬哲郎先生調査指導

県文化財保護審議会調査指導（武末・下村委員）

クロマツ移植先掘削状況

クロマツ根鉢形成作業

クロマツ移植作業

クロマツの運搬作業

クロマツ移植作業（城址公園移植先）

第34－4次調査区移植後の状況

図版八

吸出し防止マット設置

栗石充填作業

石垣復元作業

天端石までの復元状況

石垣復元完成

復元石垣（東から）

クロマツ若木の移植に伴う養生設置

移植後のクロマツ若木

第6図3

第6図2

第6図5

第6図6

第6図7

第7図9

第7図10

第7図11

第7図12

第7図13

第7図17

第7図18

第8図20

第9図22

第9図21

第10図24

第11図29

第11図30

第11図31

第11図32

第11図33

第13図36

第13図37

第13図39

第13図42

第13図44

第14図45

第14図46

第14図49

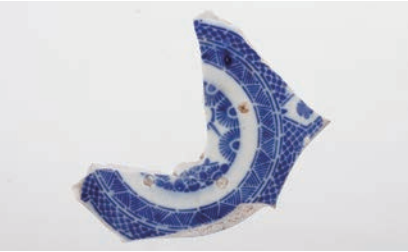
第15図50

第16図54

第16図55

第17図58

第18図59


第18図61

E地点（H29　昭和通り交差点北西角）

K地点（H29　大分カトリック教会前）

O地点（H30　県庁前バス停西側）

Q地点（H30　NTT大分支店前）

S地点（H30　大分中央郵便局前）

T地点（H30　大分市役所西側）

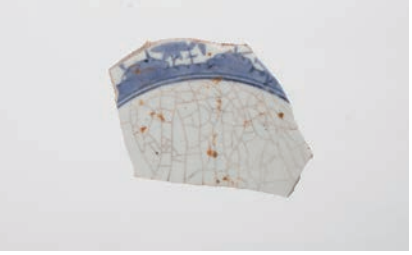
U地点（H30　大手公園前）

V地点（R1　県庁新館横駐車場前）

第20図67

第20図68

第20図69


第20図70

第20図71

第20図75

第20図76

第21図82

第21図83

第21図86

第21図87

第21図84

第21図89

第21図90

第22図93

報 告 書 抄 録

ふりがな	ふないじょう・じょうかまち（だい34じちょうさ）
書名	府内城・城下町（第34次調査）
副書名	国道197号道路改良（歩道改修）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	大分県立埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第27集
編著者名	横澤　慈
編集機関	大分県立埋蔵文化財センター
所在地	〒870-0152　大分市牧緑町１番61号　　TEL　097-552-0077
発行年月日	西暦　2023年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ふないじょう じょうかまち 府内城・城下町	おおいたしにあげまち 大分市荷揚町	44201	201041	33° 14′ 22″	131° 36′ 40″	2021.12. 6 ～ 2022. 3. 8	84㎡	国道197号道路改良（歩道改修）事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
府内城・城下町（第34次調査）	城館	近世～近代	石垣、石列	陶磁器、瓦	大分県指定史跡府内城跡の石垣一時解体・復元を実施。

要約

府内城・城下町第34次調査は国道197号道路改良（歩道改修）事業に伴い実施した。

発掘調査は歩道改修の一環として行う府内城大手前のクロマツ移植に際して実施した。調査では大分県指定史跡府内城跡を構成する石垣の一部を一時解体するため、石垣解体範囲の三次元測量を実施した後、石垣解体と発掘調査を並行して実施した。確認された主たる遺構は、石垣の裏込め層と、クロマツの根本で検出した石列１条である。石列は北面堀側に面を向けており、ある段階での石垣の痕跡の可能性がある。遺物は陶磁器、瓦等、18世紀～近代の遺物が多く出土した。出土遺物から解体した石垣は近代以降に積み直されている可能性が高い。調査終了後、解体石垣の復元を実施し、調査を終了した。

府内城・城下町（第34次調査）

－国道197号道路改良（歩道改修）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－
大分県立埋蔵文化財センター調査報告書　第27集

令和５（2023）年３月31日

編集・発行　大分県立埋蔵文化財センター
〒870-0152
大分市牧緑町1番61号
TEL 097-552-0077

印　　刷　株式会社 双林社
〒870-0048　大分市碩田町2-2-13
TEL 097-536-4111